ISSN 0289-4130

研究紀要

第19号

2004

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

序

〔論文〕

砂川期の基礎的研究(2)　―ナイフ形石器を廻る諸問題（上）―
……西井　幸雄（ 1 ）

押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性
―絡条体圧痕文土器の分析を通して画期を探る―
……金子　直行（ 25 ）

加曽利ＥⅢ式土器の拡散とフィードバック（前）……橋本　　勉（ 87 ）

瓢箪形注口土器の成立と展開……上野真由美（109）

方形周溝墓と土器Ⅱ　―概観　その１―……福田　　聖（133）

埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器
……永井いずみ（169）

方形周溝墓と土器II

—概観　その1—

福田　聖

要旨　方形周溝墓が墓制として認定されてから40年の月日が過ぎ、その間様々な研究が行われてきた。しかし、出土土器の研究については停滞しているのが実状である。周溝墓出土土器は実見にもとづく変形行為、2次加熱の把握、出土状況との関連を検討することによって、それらを用いた儀礼の地域性の析出が可能と考えられる。また、器種構成の把握やその扱われ方を検討することにより、儀礼の時間的変遷を明らかにできると思われる。弥生時代中期中葉の導入期の周溝墓では、周溝底に置かれる（納められる）、埋没進行後に置かれる、破砕される、方台部から流れ込むといった出土状況が確認され、当初から複雑な土器使用方法を採っていたことが明らかになった。特に周溝底に置かれる状況は、周溝の平面形態と合わせて再葬墓との関連を色濃く感じさせるものである。一方、群構成や土壙墓との組み合わせといった要素では異なる対照性を見せ、各々の遺跡間の関係の把握が一筋縄ではいないことを感じさせる。弥生時代中期後半では、群構成のあり方で、常代、歳勝土遺跡とそれ以外、周溝の平面形では常代、前中西とそれ以外という対照的様相が確認できた。土器の扱われ方では、中期中葉から継続する周溝底に置かれる（納められる）方法が一般的に行われ、一部の地域では周溝埋没終了直前に土器を入れる（立てる）という使用方法が加わる。こういった各要素の対照的様相、新旧の土器の扱われ方の様相は、土器の分布圏と共通する部分と異なる部分があり、当時の地域性が一つの文化要素で語り得るほど単純でないことを示している。

1、はじめに

方形周溝墓が墓制として認定されて40年の月日が過ぎた。その間、様々な形での検討が試みられ、多くの成果をあげている。その大部分が、墓制を用いて当時の社会の様相に迫ろうとする社会構成史的な視点からのものであることはたびたび述べてきた。

筆者は『方形周溝墓の再発見』（福田2000）の中で、これまでの成果は尊重されるべきものであるが、それにも増してその前提となる基礎作業が必要であると主張した。現在でもその考えは変わらない。

方形周溝墓は、遺構としての様々な要素、出土遺物の様々な様相が絡まりあい複合体として各々のものが現存している。特に底部穿孔土器に代表される出土土器の検討は、遺物として最も安定していることから、執り行われた死者儀礼の道具立てとして、その方法を知る有力なてがかりになると考えられる。しかし、その検討が進んでいるとは言い難いのも事実である。それはわれわれ全体の怠慢の結果である。かく言う筆者も、『方形周溝墓と土器Ⅰ』（福田1995　以下『土器Ⅰ』）で10年前にこの問題を扱って以降、低地の問題等にかまけて検討を怠ってきた。

また、この10年の間に筆者が用いた資料が、実は建物跡であったことが明らかになったものもあり、それらをもとにして導き出した地域差等の成果が無効となってしまった部分も出てきた。こうした個人的な理由からも再検討が必要となった。

再検討を始めるにあたり、どうしても微視的な検討に陥りがちになる恐れがある。そこで、そ

の前に関東地方全体で現在の資料から出土土器についてどのようなことが見通しとしていえそうなのか確かめることにしたい。

本稿は、その第１弾として、弥生時代中期について取り扱う。

2、方形周溝墓の検討方法

(1) 出土土器をめぐって

1995年までの研究成果については、『土器Ⅰ』でとりまとめたため、ここでは筆者が『土器Ⅰ』において行った方法についてまず確認しておきたい。

表１－１　土器の出土状況からみた儀礼行為　比企１（福田1995より転載）

遺跡名	方台部	周溝	溝中土坑
小敷田（Ⅰ期）	・周溝への完形土器(壺)の転落 ↓ 完形土器(壺)の遺棄行為 ・周溝へ焼土、炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼	出入口部で土器（壺）を礫によって破砕 周溝底に土器を置く 土器（高杯、異形土器）を火を使用する儀礼に用いる	完形の土器を埋納する
《比企地域》 代正寺（Ⅱ期）	・周溝への土器(壺)の転落 ↓ 土器(壺)の遺棄行為 ・周溝への焼土、炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼	・陸橋部際底面からの完形土器（壺）の出土 ↓ 入り口部の儀礼の存在 ・埋没途中で土器（壺）を破砕 ・周溝底に土器を置く ・周溝外周から土器（壺・甕）が転落？ ↓ 周溝外における儀礼の可能性	
花影（Ⅲ期）	・周溝への土器(壺)の転落 ↓ 土器(壺)の遺棄行為	・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向の存在	
下遠部（Ⅳ期）	・周溝への土器(壺等)の流れ込み・転落 ↓ 土器(壺等)の遺棄行為	・埋没途中で多くの土器（壺・器台・高杯・鉢）を置く	・上層からの土器の出土 ↓ 儀礼に使用？
下遠部（Ⅴ期）	・周溝への土器(壺・小型壺)の転落 ↓ 土器(壺・小型壺)の遺棄行為 ・方台部上で破砕・破損したものが周溝に流れ込む ↓ 破砕行為	・周溝外周のテラスに土器が置かれる ・テラス側で火を用いた儀礼が行われる	
中耕（Ⅳ～Ⅴ期） 四隅切	・周溝への土器(壺・台付甕)の転落 ↓ 土器(壺・台付甕)の遺棄行為	・陸橋部際底面での土器（台付甕）の破砕 ・周溝底に土器（壺・小型壺・器台・高杯）を置く	・土坑内に壺を納めた可能性

表１－２　土器の出土状況からみた儀礼行為　比企２（福田1995より転載）

遺構名	形態	方台部	周溝	溝中土坑
中期（Ⅳ～Ⅴ期）	四隅切	・周溝へ焼土、炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼の存在	・溝底で土器（甕）を破砕 ・埋没途中で土器（壺・器台・高杯）を置く ・埋没途中で土器（壺）を破砕 ・破壊面直下の土器（甕）の遺棄 ・特定の周溝に集中して出土 ： 儀礼の中心となる方向の存在	
	全周	・周溝への土器（壺・小型壺・鉢）の流れ込み ↓ 土器（壺・小型壺・鉢）の遺棄行為	・溝底に土器（壺・小型壺・器台・鉢）を置く ・木製品を土器群（壺・器台・高杯）と共に溝底近くに納める ・朱を土器（壺・高杯）を容器として納める	
	盛土遺存	・周溝への土器（高杯）の転落 ↓ 土器（高杯）の遺棄行為	・周溝底に大量の土器（壺・器台）を置く ・炭化材・焼土が土器群と伴出 ・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向の存在 ・朱が用いられる	

『土器Ⅰ』では、総論的研究を行う前提として、資料の実見を基礎とする土器の出土事例の分析が第一であるとした。現在でもその主張に変わりはないが、皮肉にも本稿は現時点を確認するためにその逆の立場を取っている。また、実見する資料を選択するに当たり土器の分布圏を用いているが、南関東的な土器分布圏の代表として大宮台地の南部と荒川低地の例を取り上げたことは恣意的で何らの根拠もない。この点については、山岸良二・柿沼幹夫・伊藤敏行の３氏から批判をいただいた。

土器そのものについては実見をもとに変形行為について確認し、合わせて器種構成とどのような関係にあるかを検討した。その上で、遺構との関係性を問題とし、平面的、層位的な出土状況の把握、出土した覆土に含まれている焼土や炭化物等の含有物を確認し、その出土土層の評価を行った。これらの検討をもとにそれがどのような儀礼の結果によるものかを推察した。

比企丘陵と大宮台地南部について出土状況からみた儀礼行為をまとめたのが表1である。ここで取り上げた大宮台地南部・荒川低地の資料の内、鍛冶谷・新田口遺跡については、その多くが周溝を有する建物跡であることが明らかになり（福田2003）、ここで掲げた成果は再検討の必要がある。

もう一つの地域として取り上げた比企丘陵や高坂台地を中心とする吉ケ谷式の分布地域では、使用器種として大形壺を中心にした壺の優位性が弥生時代終末、古墳時代前期に至っても継続すること、坩、器台、高坏という所謂３種土器が限定された遺構から出土するものであることを明らかにした。

土器の変形行為については、弥生時代中期中葉から認められるとしたが、後に述べるようにそ

表1－3　土器の出土状況から見た儀礼行為　大宮台地（福田1995より転載）

遺跡名	方台部	周溝	溝中土坑
明花南（II期）	・周溝へ焼土・炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼 ・周溝への土器（壺・甕・鉢） ・ 土器（壺・甕・鉢）の遺棄行為	・埋没途中に土器（壺）を置く	
綾治谷・新田口（III期）	・周溝への土器（壺）の転落 ↓ 土器（壺）の遺棄行為 ・周溝への破砕土器の廃棄 ↓ 破砕→廃棄行為 ・周溝へ焼土、炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼	・埋没途中に土器（壺・広口壺・鉢）を置く ・陸橋部底面に土器（壺）を置く ↓ 入口部の儀礼 ・コーナー底面に土器（壺）を置く ↓ コーナーの儀礼 ↑ ・コーナー上層に細片の土器を廃棄	・底面に土器（壺）を置く ・上層に土器（壺）を細片と共に置く
綾治谷・新田口（IV期）		・周溝底、確認面に構平的にも前後関係がある土器を破砕、遺棄する ↓ 儀礼の複次性 ・異なる周溝墓の破片と接合 ↓ 儀礼の同時性	
綾治谷・新田口南町（V期）	・周溝への土器（小型壺・鉢）の転落 ↓ 土器（小型壺・鉢）の遺棄行為 ・周溝へ焼土・炭化物が流れ込む。 ↓ 火を使用する儀礼 ・主体部で土器が使われる	・上層へ多量の細片の廃棄 ・確認面直下の土器の遺棄 ・確認面直下の土器の破砕 ・コーナー上層へ細片を廃棄 ・周溝墓外から土器が廃棄される ・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向	・上層に焼土を伴って土器（壺・高杯）を破砕 ↓ 火を用いた破砕

の判断は現在では誤りであったと考えている。特に、『土器Ⅰ』で明らかになった中耕遺跡（杉崎1993）等で見られるような周溝墓の内約半数の遺構に底部穿孔土器がみられるといった極度に肥大化した状況は、弥生時代においてこの儀礼行為が一般的でなかった地域における受容のあり方を示しており、先の判断が誤りであったことを示唆している。

一方、破砕行為は弥生時代中期の小敷田遺跡で認められるものの後期には継続せず、新たに弥生時代終末から周溝の上・中・下層で見られるようになり、古墳時代の各段階で行われるようになる。

また、土器に小敷田遺跡以来継続して２次加熱の痕跡が認められ、後期には何らかの火を用いる儀礼に土器が供されていたことが明らかになった。

このように、『土器Ⅰ』では、①土器そのものの変形行為、２次加熱の実見に基づく把握、②そこで得られた様相と出土状況の関係の把握、③地域間の比較により共通点、相違点を明らかにし地域ごとの特徴を明らかにする、といった方法が有効であることを確かめることができた。

『土器Ⅰ』以降で出土遺物を含めて最も大きな成果は、『関東の方形周溝墓』（山岸1996）で

表2　神奈川県における周溝墓出土土器の層位（立花1996より転載）

時期	穿孔・打欠・分割								完形									
	底部穿孔壺		胴部穿孔壺		打欠壺		甕脚台		壺		小型壺		甕		鉢・椀		小型丸底壺	
	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
II期	0	0	0	5	5	4	2	0	2	7	0	1	1	2	2	0	−	−
III期	23	1	0	1	8	1	2	4	2	5	4	3	1	0	1	2	−	−
IV期	7	0	5	0	9	1	2	5	0	1	4	0	0	0	1	1	−	−
V期	0	0	1	2	1	2	1	3	1	5	0	4	0	0	0	3	1	3
計	30	1	6	8	23	8	7	12	5	18	8	8	2	2	4	6	1	3

〈壺以外の穿孔・打欠土器〉　II期：甕　底部穿孔（上層 3）、底部打欠（下層 1）
V期：甕　脚部穿孔（上層 1）、大型壺　胴部穿孔（下層 1）

〈この他の完形土器〉　IV期：高坏（上層2）、（下層2）、小形高坏（下層1）、小型器台（上層1）、（下層 1）、甕（上層1）
V期：高坏（上層1）、小型器台（上層1）

※小型壺は、器高20 pを越えないものを指す

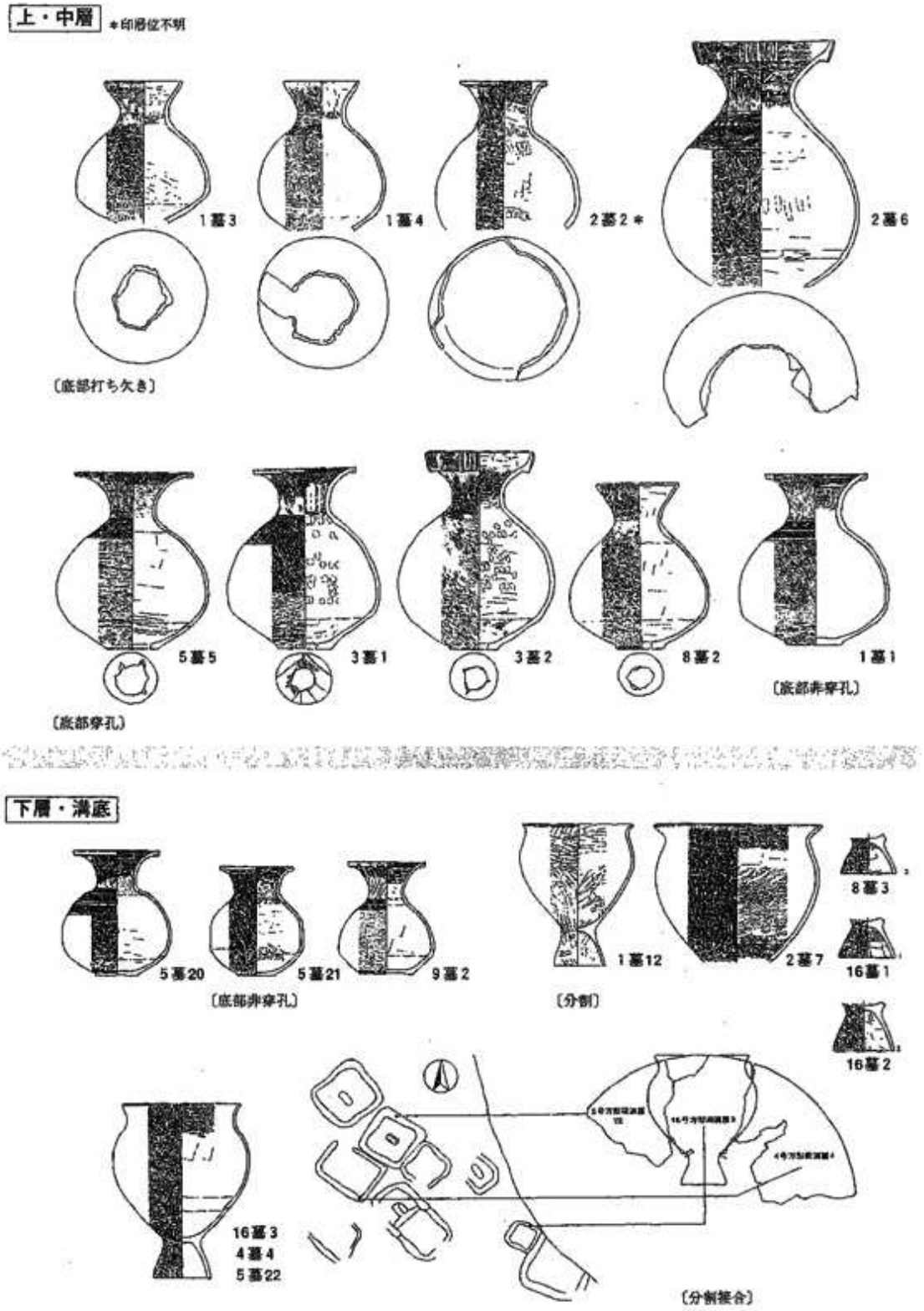
ある。筆者もこの機会に熟読し、実に多くの成果や有用な視点が詰まっていることを改めて感じることができた。ここでは、本稿と関係する出土土器の問題を中心に主として検討の視点について概観することにしたい。

立花実氏は神奈川県内の周溝墓出土土器について取り扱う中で、いくつかの新たな視点を提示している。中でも底部穿孔土器についての考え方と、土器の出土層位についての評価は参考になる。氏は底部穿孔について、底部穿孔、底部打欠、胴部穿孔、胴部打欠に分け、「打欠は他が残りながらも一部分の欠損が認識できることに意味があ」（立花1996pp.189ℓ3・4）り、底部穿孔土器については「外見からは使用不能なことがわからないように加工してあることが特徴」（同pp.189ℓ6）と評価する。特に後者については「穿孔した状態で使用することを目的としているためと考えられ、つまりは祭祀後に穿孔したのではなく、祭祀に使用するために穿孔したと考えるべきだろう」（同pp.189ℓ7・8）と、廃棄のための穿孔という考え方に疑問を投げかけている。焼成前穿孔土器が古墳の墳丘に立て並べられたと考えられていることと同等の使用方法を想定すべきだとの主張は、焼成前穿孔土器の評価に対する弥生時代の側からの警告とも言えるだろう。

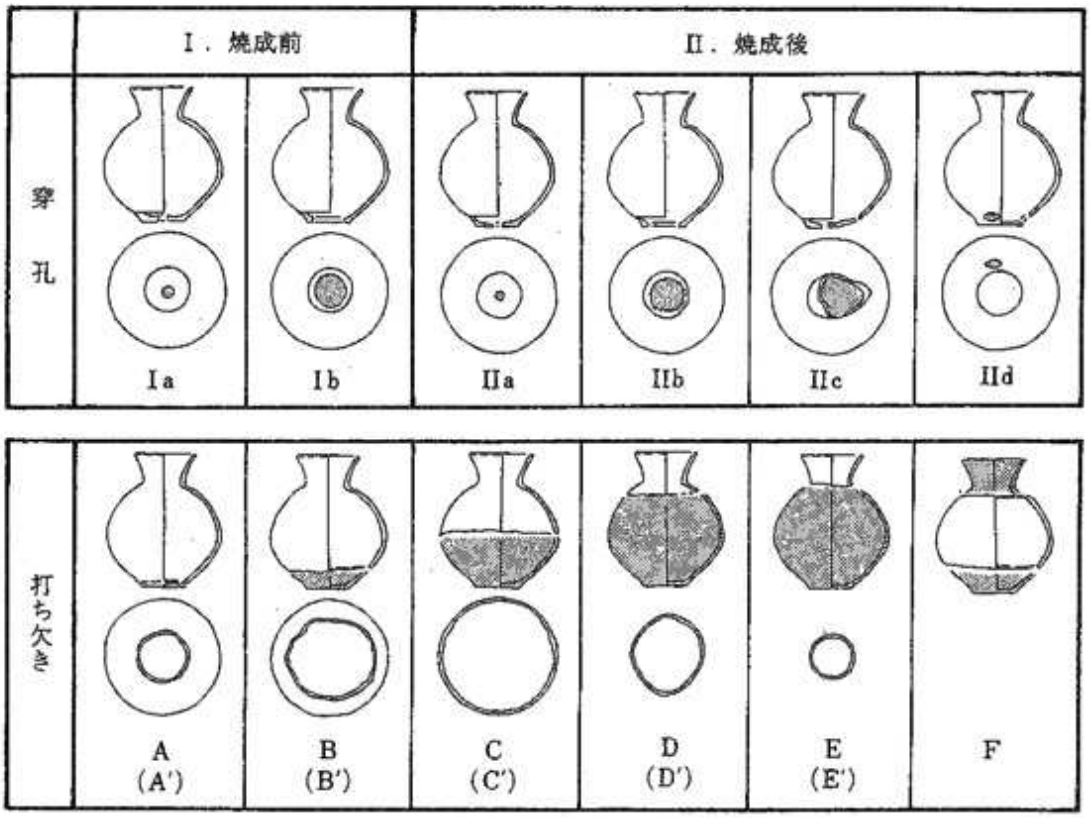
次に周溝内出土土器については、土器に加工行為が認められるものと完形土器が時期ごとにどの層位から出土するのかをまとめている。（表2）それによれば、底部穿孔、打欠の壺は「圧倒的に覆土上層」からの出土が多く、内容物を供献したと考えられる小型の壺は「圧倒的に下層」から出土することを指摘し、異なる道具立ての複次的な儀礼行為を明らかにしている。（第1図）

及川良彦氏は東京都出土の周溝墓出土土器について取り扱う中で、穿孔等の加工行為が認められる土器について第2図のような分類模式図を用いて検討している。（及川1996pp.220～223）また、氏は弥生時代終末から古墳時代前期にかけて、周溝墓出土土器に器形や法量、調整や製作手法が似通った2個一対の器があることに着目し、これを「対の土器」と呼んで、焼成後穿孔のあり方から、これが実際の墓でも一対のものとして取り扱われていることを明らかにした。（同pp.224～226）

同様の主張は、既に及川氏の共同作業者でもある合田芳正氏が、神奈川県海老名市の本郷遺跡



第1図　王子ノ台遺跡における上・下層出土土器の違い（立花・秋田2000より転載）



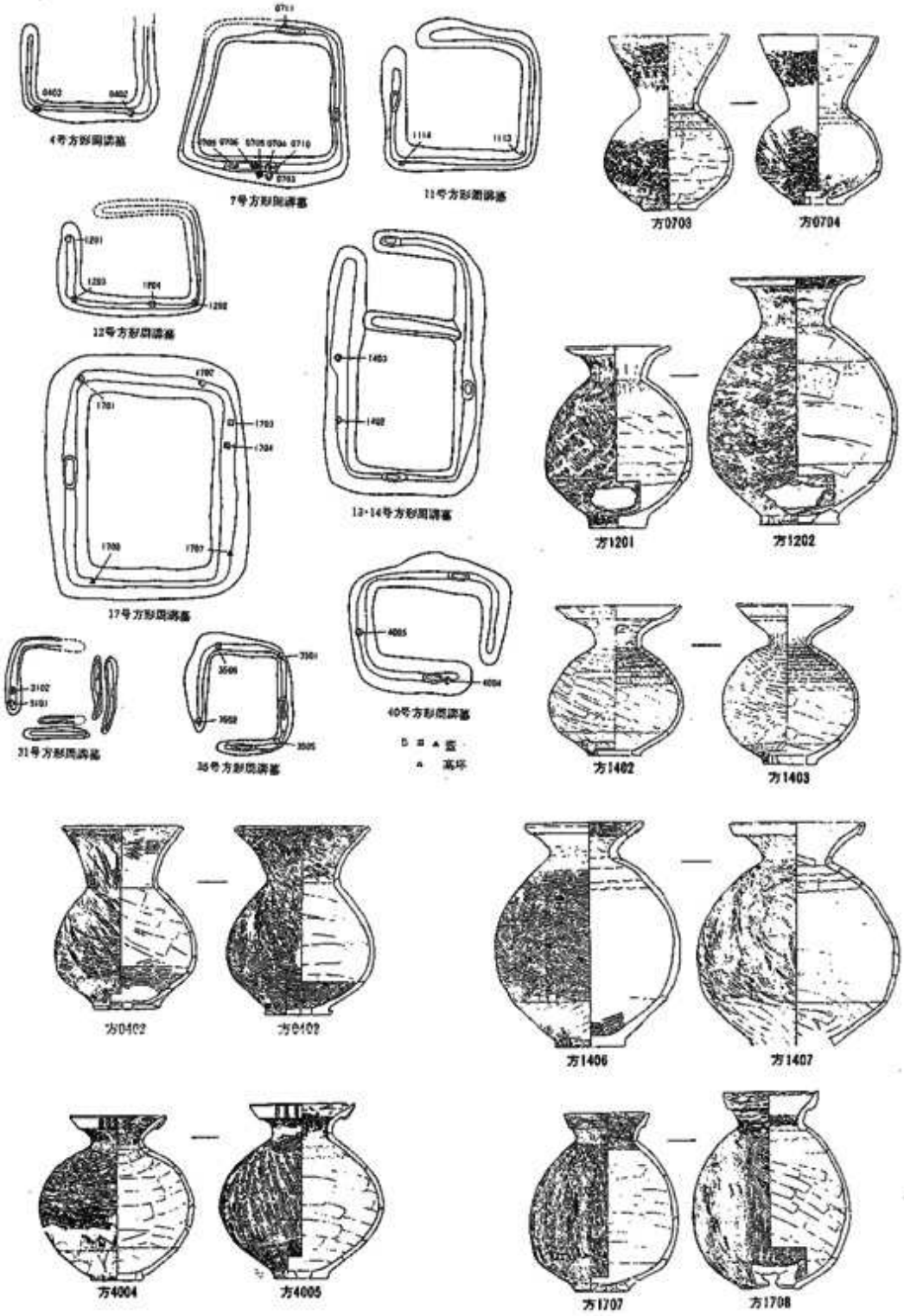
第２図　穿孔・打ち欠き土器分類模式図（及川1996より転載）

の分析を行う中で行っており、製作時から周溝墓用に作られた土器が使用されていることに注意を促している。（合田1995pp.1027～1032　第３図）

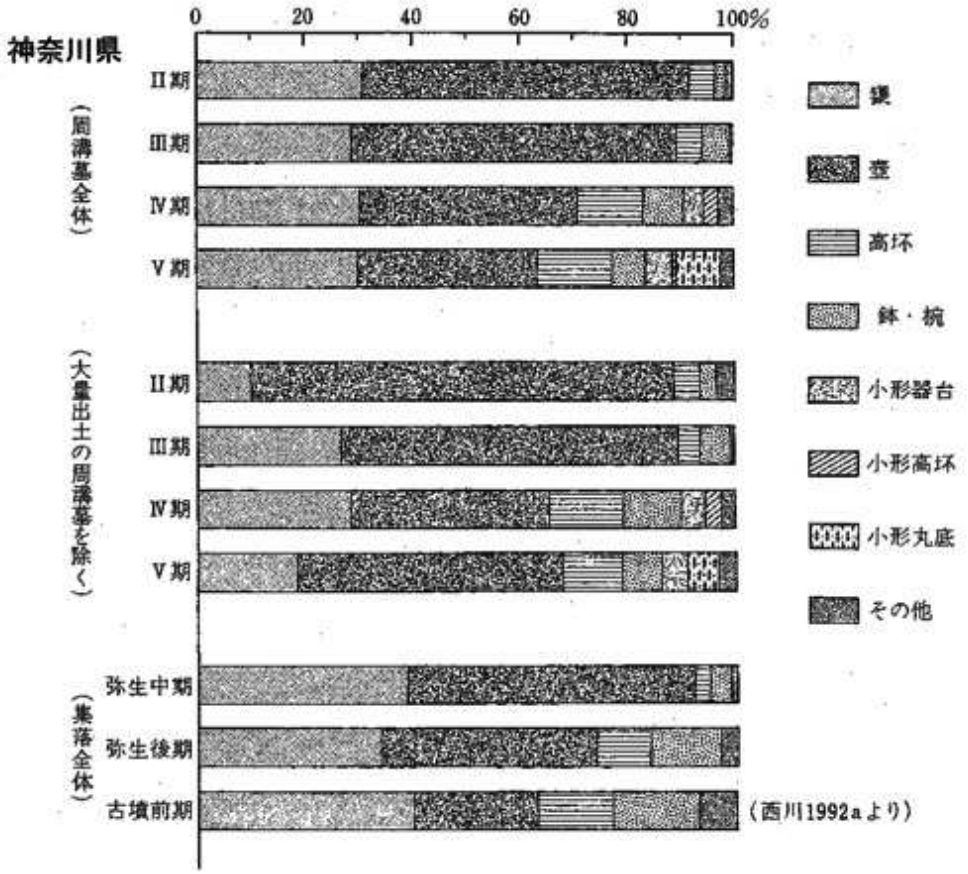
以上、大変雑駁ではあるが周溝墓出土土器の特に検討方法に絞ってみてきた。『土器Ⅰ』では、①土器そのものの、変形行為、２次加熱の実見に基づく把握、②そこで得られた様相と出土状況の関係を把握する、③地域間の比較により共通点、相違点を明らかにし地域ごとの特徴を明らかにする、といった方法が有効であることが確かめられた。加えて、立花氏の出土土器に対する理解、及川氏の加工行為の認められる土器に対する取り扱い、及川・合田氏の「対」の土器に対する指摘は新たな視点として重要である。こういった検討の結果得られる、方形周溝墓からみた地域性の把握、その独自さと交流の様相を明らかにすることが本稿の目的の一つと考えられる。

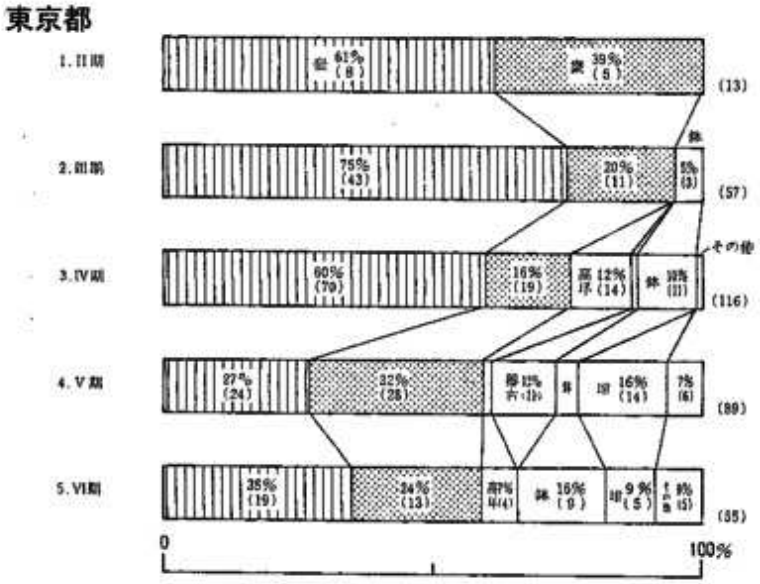
これに加えて、従来から行われてきた器種構成の問題もおろそかにはできないだろう。（第４・５図）弥生時代の及川氏がいう「壺の時代」（及川1996pp.220ℓ2）から、それ以外のいわゆる「三種土器」への器種構成の変化は、伊藤敏行氏が古くから指摘（伊藤1988）するように現在でも大きな変化は見られない。しかし、一方で集落出土土器の器種構成そのものが変化しており、相対的に周溝墓出土土器の器種も変化しているのだという指摘も同時に古くからあり、その双方を納得させるにはいたっていないことにも留意する必要があるだろう。

『関東の方形周溝墓』中でも埼玉県（柿沼1996）をはじめ、各県の周溝墓出土土器について詳細な検討がなされている。本稿は当然それらの成果に導かれることになる。それらについては折に触れ取り扱いたいと考えている。

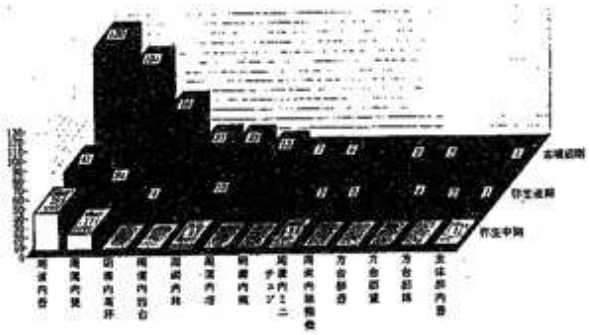


第3図　海老名本郷遺跡の「対」の土器（合田1995より改図・転載）



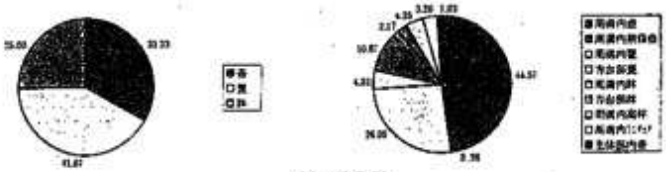


第4図　方形周溝墓出土土器の各時期の器種構成（1）（及川1996、立花1996より転載）



器種別出土土器数

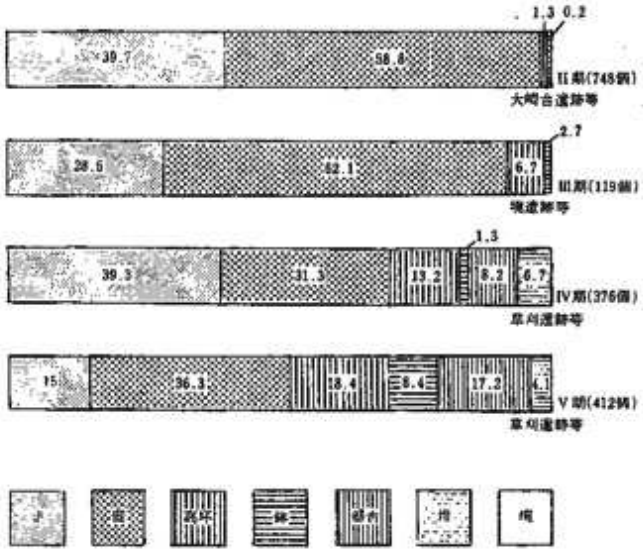
弥生時代中期



弥生時代後期

集落遺跡出土土器組成　　墓跡出土土器組成

千葉県



第５図　方形周溝墓出土土器の各時期の器種構成（2）
（上段－君津郡市文化財センター1996、下段－菊地1996より転載）

(2) 地域の取り扱いについて

検討に入る前に、資料を選別する前提となる弥生・古墳時代、特に弥生時代の地域がどのようにとらえられているか述べておきたい。

「土器Ⅰ」でも述べたように、考古学において地域性を代表させる遺物として用いられるのは土器である。それは、土器が持つ最も一般的で消耗品であるという性質による。本稿はそういった土器のみでは見えてこない不動産的で保守的な地域性を考えようというものだが、作業の手続きとしては既に知られている土器分布圏を用いるのが妥当であろう。

弥生時代中期は、現在弥生時代の中でも最も研究が盛んな時期である。中でも石川日出志（石

第6図　弥生中期後半の4つの土器分布圏（石川2002より転載）

表3　弥生時代中期の各土器分布圏の文化要素（石川2002より転載）

	土器型式	集落形態	墓制等	その他
宮ノ台地域	宮ノ台式土器 遠江系要素明瞭 櫛描き文 ハケ整形 地域外搬出稀・局地的	環濠集落多 大型集落 集落群形成	方形周溝墓 壺　　棺 居住区内大形周溝墓 御新田式壺墓制参画	有力首長出現 積極的水田経営 鉄器保有多い 西日本弥生社会と連動 骨　　卜
竜見町地域	竜見町式土器 中部高地系 櫛描き文定着 ハケ整形 3地域へ搬出	環濠集落あり やや小形 集落群形成	方形周溝墓 再葬墓・火葬 居住区内大形周溝墓	有力首長出現 本格的水田経営 武器形石製品搬入 打製石斧残存
御新田地域	御新田式土器 関東在来系 櫛描き手法定着（条痕文系） ハケ整形なし 宮ノ台・竜見町地域へ搬出	環濠集落なし 小規模集落のみ	方形周溝墓なし 土抗墓か	不明点多い
足洗地域	足洗式土器 東北南部系 渦巻き文 特殊な縄文 ハケ整形なし 宮ノ台地域の一部のみに搬出	環濠集落なし 小規模集落のみ	方形周溝墓なし 土抗墓と壺棺墓	有角石器 大陸系磨製石器明瞭

川2002)氏の設定した４つの地域は大枠において受け入れられていると考えて差し支えないだろう。

石川氏は、関東地方を御新田式土器分布圏、足洗式土器分布圏、竜見町式土器分布圏、宮ノ台式土器分布圏の４つの土器分布圏に分け、集落、墓制、石器等について検討を加え、その関係を明らかにした。（第６図・表３）特に、墓制については、後に触れる「環濠集落内大形方形周溝墓」の指摘や壺棺墓や土坑墓といった他種の墓制との併存の様相を明らかにするなど示唆に富んでいる。

弥生時代後期については比田井克仁氏が長年の研究の結果として示した土器分布圏が尊重されるべきものであろう。（比田井1993）氏は、関東・東北地方南部を「(1) 縄文を多用する東北地方、(2) 縄文を帯状に施文する東海地方東部と南関東地方、(3) 櫛描文を用いる中部高地地方と北関東地方、という特徴をもつ土器の三つの分布圏がそれぞれの南限と東限で一堂に集合する地域」（同pp.357ℓ6～9）と評価し、更にこれらの重なり合いとして５つの分布圏を示している。「(1) 縄文を多用し、磨消縄文やヘラ描沈線で文様を構成する、天王山系土器群が分布する東北南部、越後、会津、(2) 縄文を多用するが、加えて櫛描文も盛行する、東中根式、十王台式が分布する東関東北部、(3) 縄文を多用するが、そのほかこれといった文様をもたない上稲吉式、印旛手賀沼系土器様式（印手式）が分布する東関東南部、(4) 櫛描文が主体となる樽式、岩鼻式が分布する北関東、(5) 縄文を帯状に施文する西相模様式、南武蔵様式、房総様式で構成される南

357−1. 関東・東北南部の土器分布圏
①天王山系土器群
②東中根式、十王台式
③上稲吉式、印旛手賀沼系土器様式
④樽式、岩鼻式、箱清水式
⑤西相模様式、南武蔵様式、房総様式、登呂式、飯田式

第７図　弥生時代後期の土器分布圏（1）（左－比田井2003、右－設楽1991より転載）

関東」（同pp.357ℓ2～17）がそれである。（第７図左）

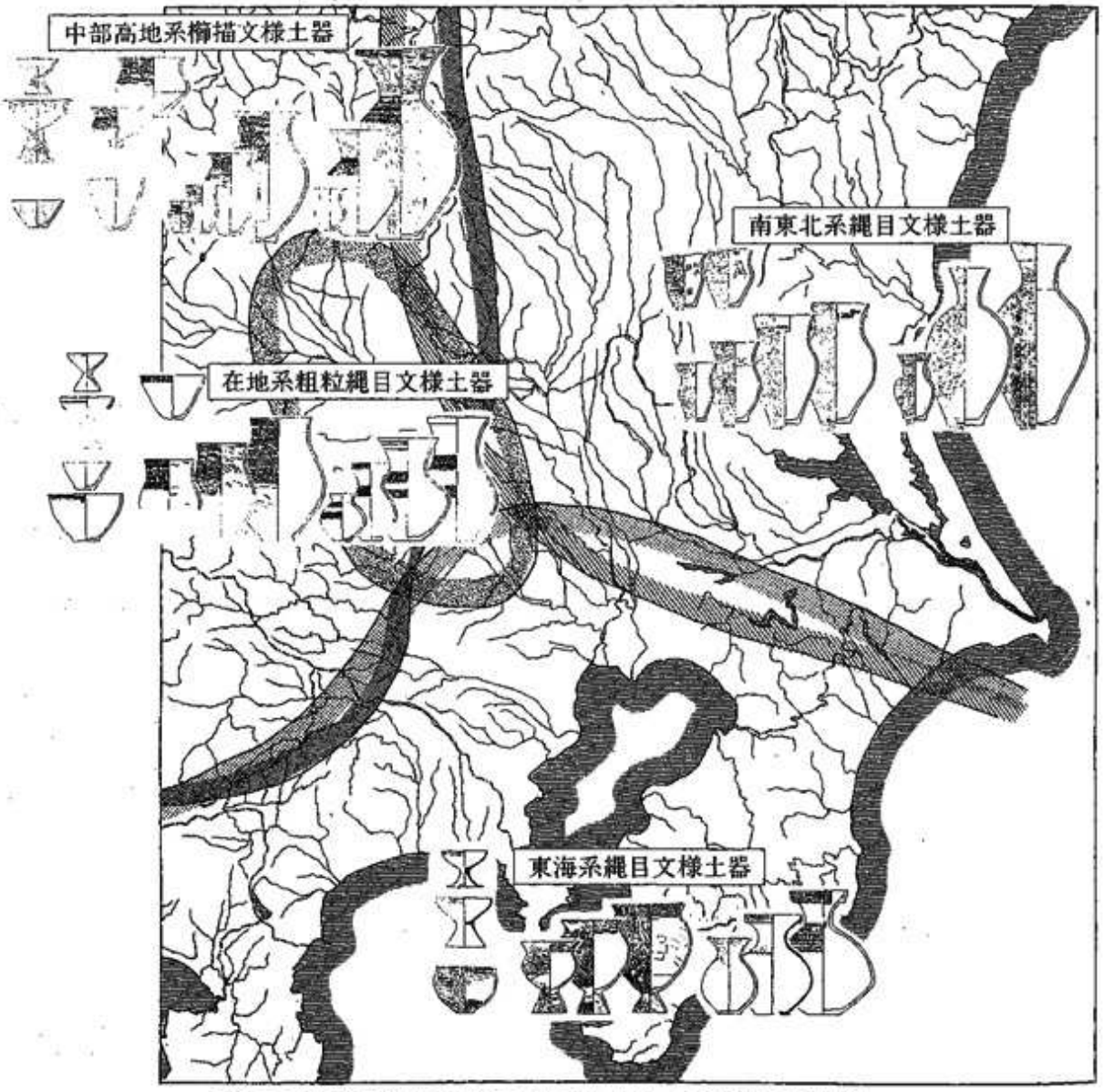
設楽博巳氏も、帯縄文土器群、櫛描文土器群、縄文多用土器群として把握し、それぞれの内部の様相について述べている（設楽1991　第７図右）。

これをもっと一般的に示したのが、中村倉司・宮瀧交二氏である（中村・宮瀧1994）。「東海系縄目文様土器群分布圏」、「中部高地系櫛描文系土器群」、「南東北系縄目文様土器群」、「在地系粗粒縄目文様土器群」という用語自体に各土器群が密接に関係する系統関係を表現し、弥生時代後期の関東地方が各地と密接な関係を保ちながらその結節点として位置づけられることを示している。（第８図）

以上の各氏の地域設定、特に後期の各氏の地域設定はおおむね重なり合うといってもいいだろう。以下の検討では各氏の見解を参考に、各時期の様相についてみることにしたい。

また、検討に当たっては土器のみではなく、時期的、地域的な差異を直接反映する可能性が高い周溝墓の平面形態や群構成についても取り扱った。この両要素が、出土土器の様相とどのように関係するかも地域性の検討には重要な視点を提供すると予想されるからである。

なお、本稿では時期区分として、遺構の性格上細分した時期区分を用いず、『関東の方形周溝



第8図　弥生時代後期の土器分布圏（2）（中村・宮瀧1994より転載）

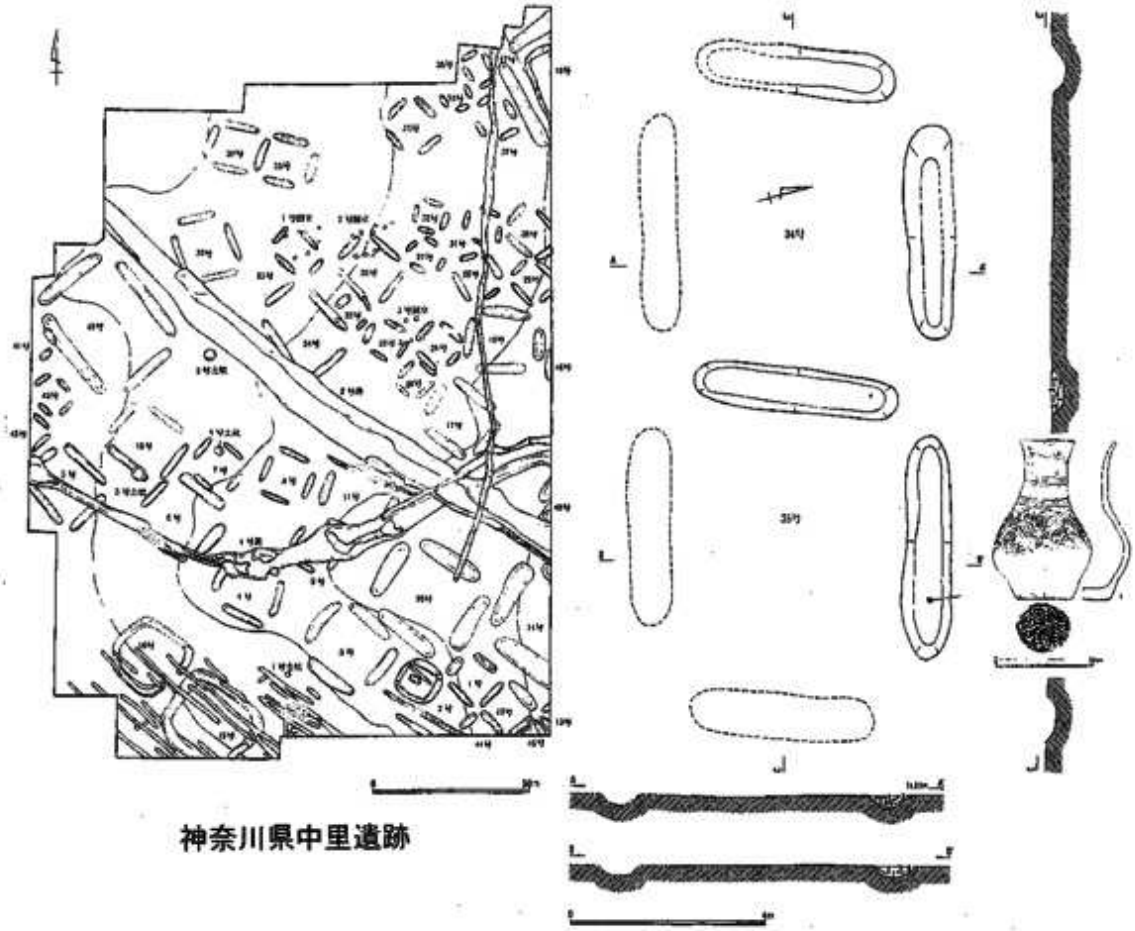
墓』で用いた、「Ⅰ期－弥生時代中期中葉、Ⅱ期－弥生時代中期後葉、Ⅲ期－弥生時代後期、Ⅳ期－弥生時代終末・古墳時代初頭、Ⅴ期－古墳時代前期」という時期区分を使用する。

3、各時期の様相

(1) 第Ⅰ期の様相

関東地方における方形周溝墓の導入は、弥生時代の階層化された墓制の受容として、社会構成史的には画期的な出来事であるが、実際の導入は縄文時代以来の伝統を色濃く残すものであった。

関東地方で最も古い方形周溝墓は、神奈川県小田原市中里遺跡（河合1997）、千葉県君津市常代遺跡（甲斐1996）、埼玉県行田市小敷田遺跡(吉田1990)があい並ぶものとして知られている。

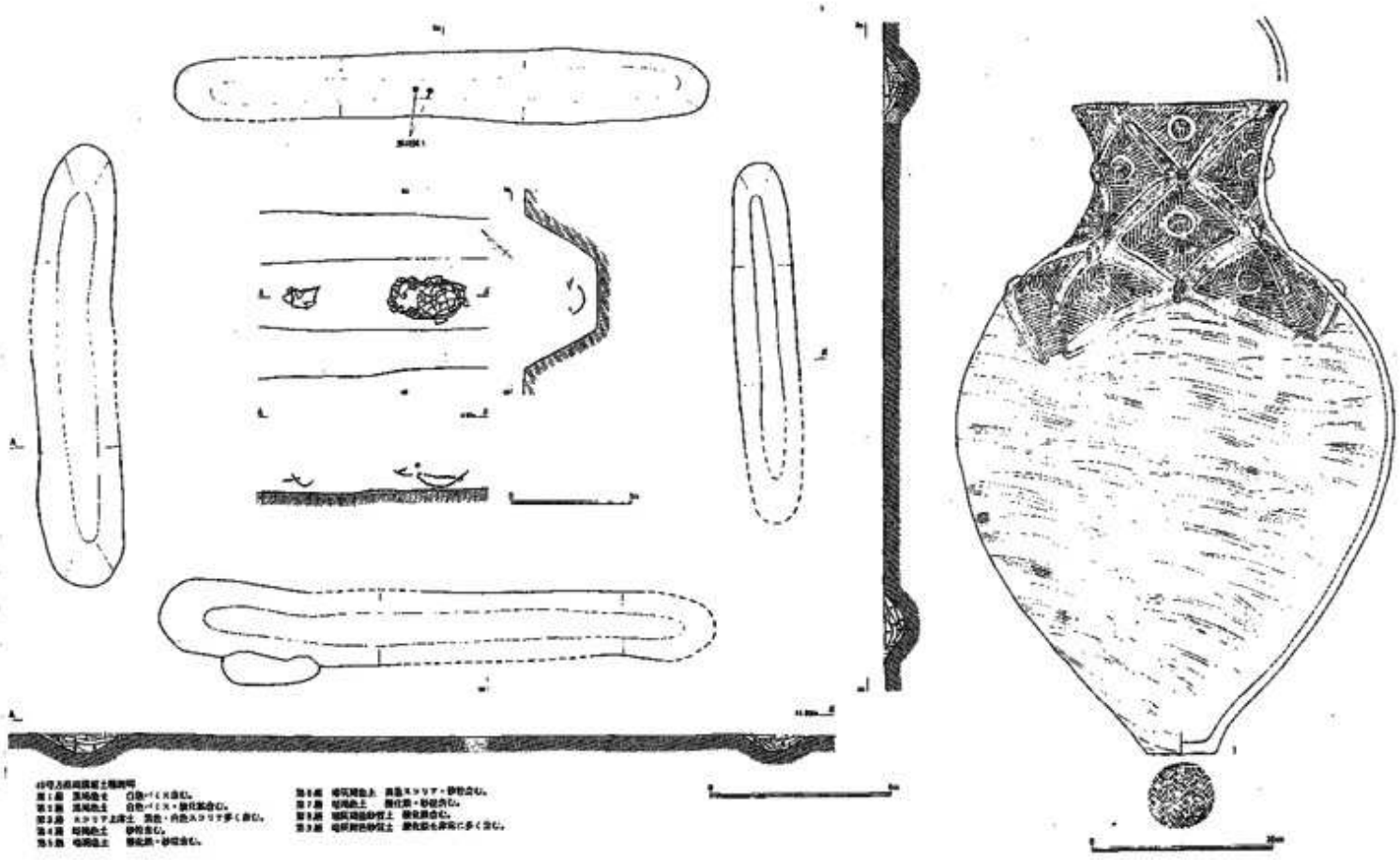


第９図　中里遺跡全体図と35号周溝墓（河合1997より改図・転載）

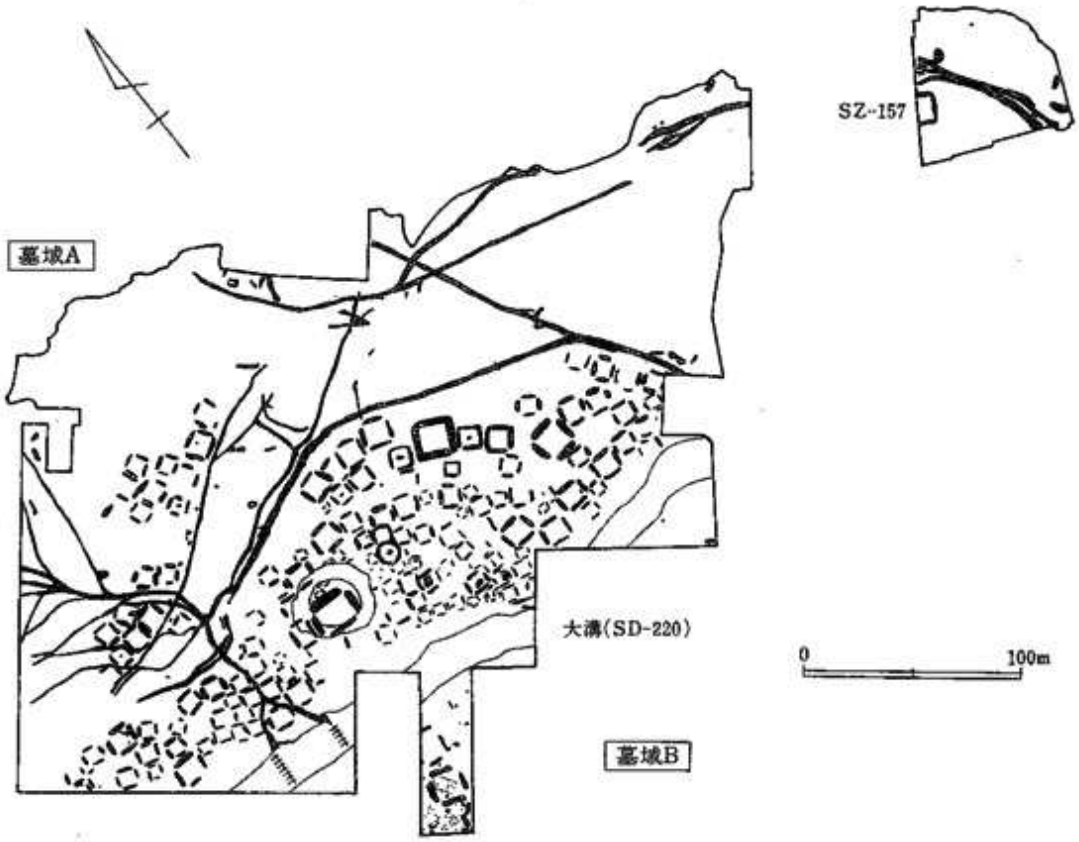
（第９図～13図）どれをもって最古とするかといった議論が不毛であるのは言うまでもない。問題は、相模、房総、北武蔵といった関東地方の各地においてどのような形で受容され展開したのかということだろう。

平面形　中里、常代、小敷田いずれも四隅切れの平面形である。ただし、周溝の平面形は中里がやや幅の狭い細長い印象を受けるものであるのに対して、常代、小敷田のものはやや太めで長楕円形のような印象を受ける。甲斐博幸氏は１期の土器が出土する周溝墓は、「比較的小型で周溝が土壙状になり、底面は平坦でなく、舟底状あるいは凹凸が見られる」（甲斐1998pp.45ℓ8・9）という特徴があることを指摘している。これは、後述する土器の出土状況とも関係し、前者が当初から周溝墓の周溝として導入が図られたのに対して、後者の周溝が土器を収める土壙として意識されていたことによるものと考えられる。

群構成　中里遺跡では、総数49基のうち46基が１期の周溝墓である。河合英夫氏は、小規模なものは列状の分布を示し、大型のものは単発的、独立的な分布を示すことを指摘している。ただし、両者は無関係に分布するのではなく、軸方向が一致し、周溝が近接するなど有機的な関係を窺わせる。河合氏は大小の組み合わせからなる少なくとも４つのブロックの存在を認めている。



第10図　中里40号周溝墓と出土土器（河合1997より転載）



千葉県常代遺跡（墓域A・B）全体図（1／3000）

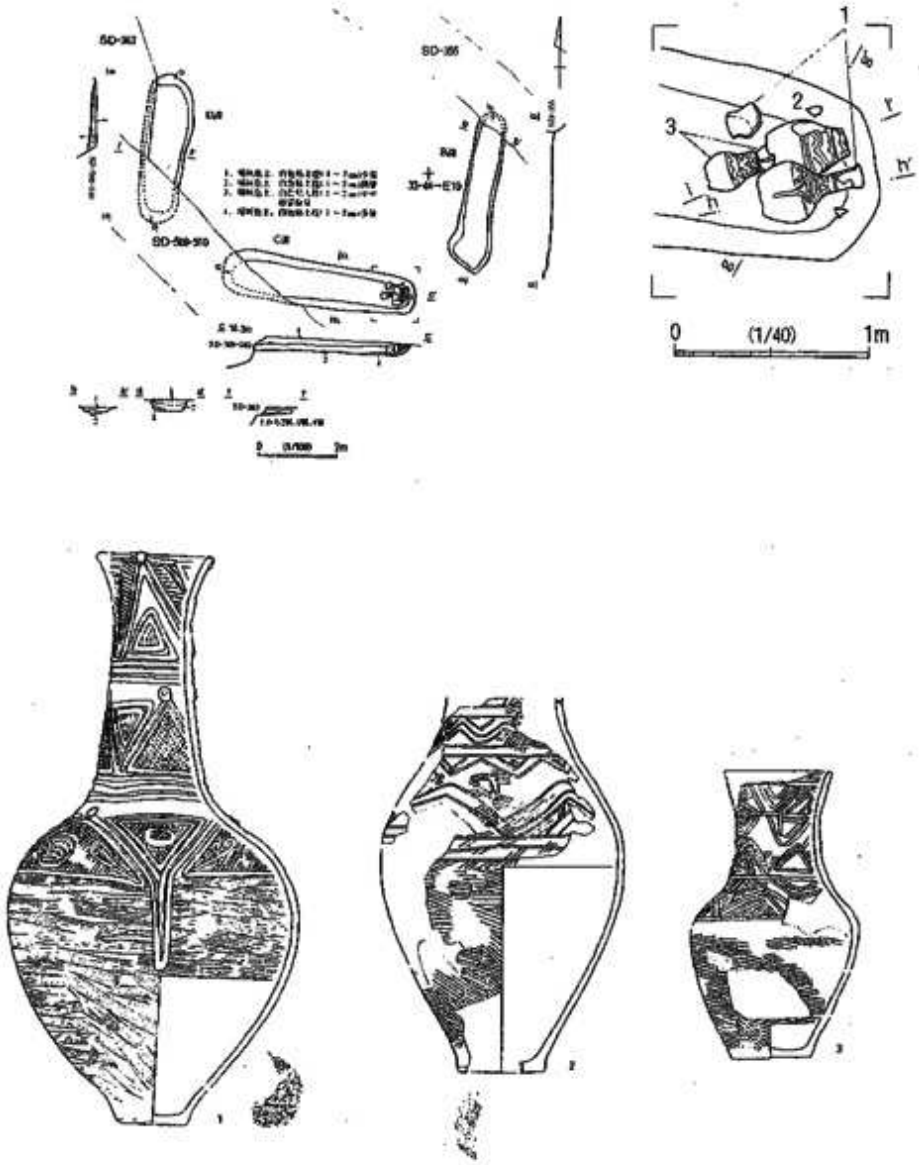
第11図　常代遺跡全体図（甲斐1996より転載）

常代遺跡では、Ⅰ期からⅣ期にかけての周溝墓群が154基検出されている。この内Ⅰ期に該当するものは36基である。（甲斐1998）墓域Aでは、SZ76を中心にブロック状の大型周溝墓と周辺の中型、ごく小型の周溝墓といった群構成で造営をスタートさせている。この群構成の状況は甲斐氏が指摘するように、愛知県清洲町朝日遺跡墓域Bの様相と同様であり、貝田町系土器、東海地方東部系土器の出土と合わせて、本遺跡の周溝墓導入の経緯を示すものと考えられる。

一方、小敷田遺跡では、同じ河川沿いのやや離れた時期の下る前中西遺跡（第18図　吉野2003）の例を含めても、中里、常代のような大きな群は認められない。特に、小敷田遺跡では同規模の３基が連接して造営され、一つの造営のあり方を示していると考えられる。

小敷田遺跡が独立的、単発的である一方で、他の２遺跡は当初から規模の大小の組み合わせがある群構成を呈し、対照的である。

こういった周溝墓同士の大小の組み合わせとは別に、常代遺跡、小敷田遺跡では土坑群が検出されている。これらの土坑には、焼土や炭化物が含まれており、周溝墓群と有機的関係がある土壙墓や埋葬に関係する施設と考えられている。（註１）関東地方における周溝墓という墓制の導



第12図　常代遺跡SZ134（甲斐1996より改図・転載）

人のあり方を示す組み合わせと考えられる。中里遺跡ではこういった土坑は検出されておらず、時期的なものもあるのだろうが対照的である。

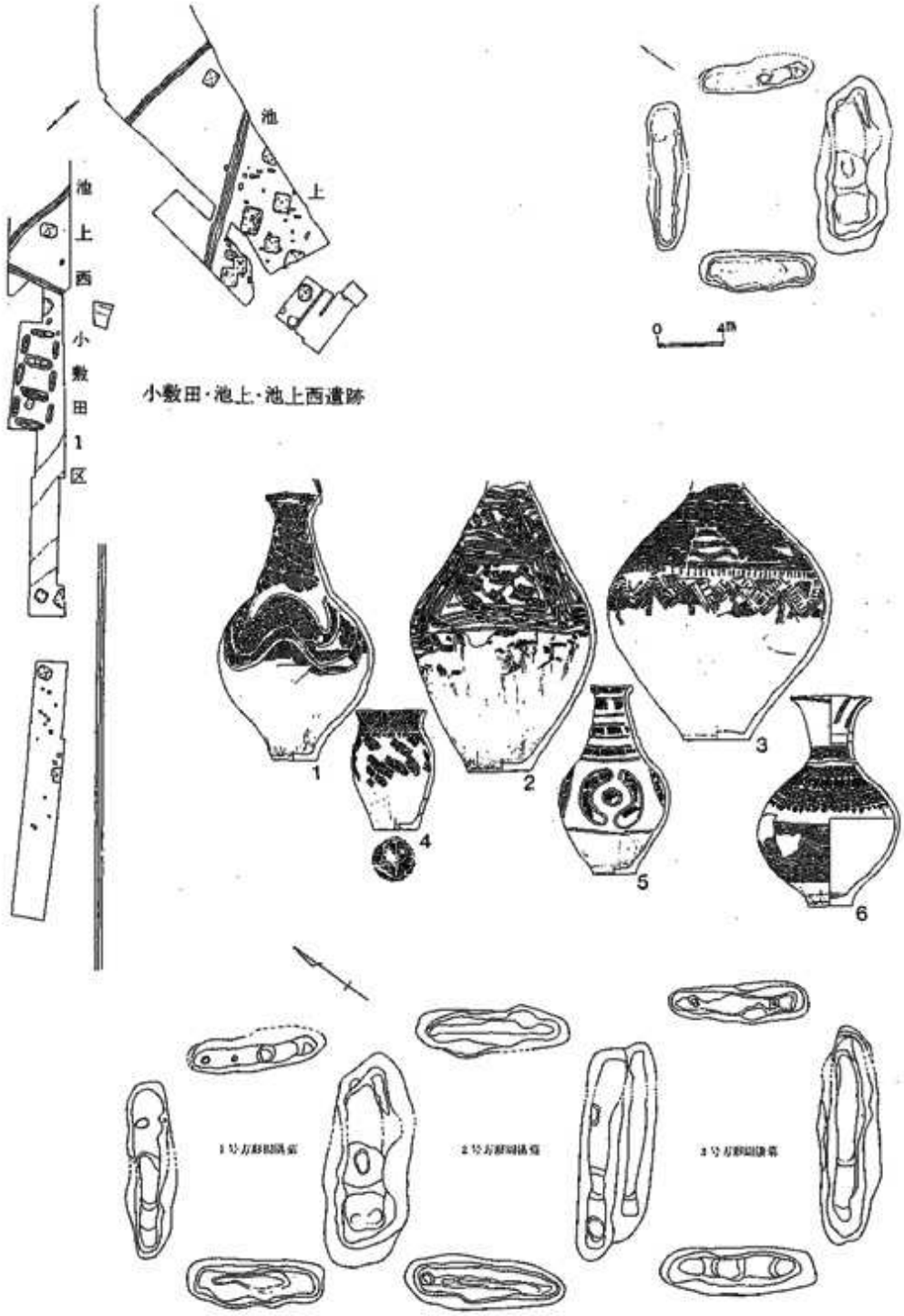
土器の出土状況　各々の遺跡では埋葬施設が確認されておらず、副葬品、着装品的な遺物の出土はみられない。出土遺物の大部分は土器である。

中里遺跡では遺物が出土している例そのものが少なく、47基中5基のみである。12・26・39号方形周溝墓では、周溝の端部近くの底面から10cmほど浮いて、全形の窺える壺（12・26号）、鉢（39号）が出土している。12号のものには胴部穿孔が施されている。35号方形周溝墓では、北溝の東寄りの底面に横倒しの状態で小型の壺が出土している。40号方形周溝墓では中央部底面から10cmほど浮いた状態で、壺棺と考えられる大型の壺が出土している。周溝覆土堆積開始後間もなく入れられたものと考えられる。

表4　常代遺跡の土器出土状況（甲斐1996より転載）

時期	北溝（A溝）			東溝（B溝）			南溝（C溝）			西溝（D溝）		
	NW	NC	NE	EN	EC	ES	SW	SC	SE	WN	WC	WS
2期（須和田）	2 63 [■]カメ [94] 151	17カメ 63カメ 76B溝 151ﾀﾃﾞ-ﾎﾘ	151	91 ハチ	2 タタキ 13	84 [67] 151 カメ	92	37	2 レキ 37 ハチ 91 134 壺3	61 151	81 タタキ 61 [151]	32壺·カメ 61 64 92 151
3期（須～宮）	26 35 カメ	26	[26]	26 23壺·甕 ·鉢·ﾎﾘ	62		75 62	36 62	75ﾐﾆﾁｭｱ			23
4期（宮古）	3 148 カメ	136 壺·鉢 平片刃石斧	148 144	129 127	([■]) 壺2 137 131 ←→ 131	129 80 ←→ 80	22-22 143 壺2 [114] カメ	126	22 57	148鉢·甕 片刃石斧 [114] カメ 117壺·カメ	148	53 カメ 54 57 117 カメ 122 126
5期（宮中）	19 138 ←→	19 138 ←→	10 138	4カメ 138	138	5 壺2 138	138		[147] カメ 138	138	138 壺 タタキ	115
		112	130 広壺	58 カメ 139 カメ 30		138 壺 ハチ [■] 115 146						
6期（宮新）	1 ハチ2	107	1 ハチ [8]		([■]) カメ 8		113			107	([■]) カメ 8	113
7期	48	47										
時期不明			154	154		[116] 木刀	150		150		116 150	154
遺構～10cm	6点	8点	2点	9点	3点	7点	3点	3点	6点	0点	2点	8点
10～20cm	0点	0点	2点	0点	1点	3点	4点	0点	3点	0点	2点	1点
20cm～	6点	3点	6点	3点	3点	3点	3点	1点	1点	7点	4点	4点
遺構外	1点	0点	0点	0点	1点	1点	0点	0点	0点	0点	1点	0点
合計	13点	11点	10点	12点	8点	14点	10点	4点	10点	7点	9点	13点

※数字は方形周溝墓の番号　※13：底面から上に10cm以内で出土。13：底面から上に10～20cmで出土。13：底面から20cm以上で出土。■：周溝外から出土。
※器種の記載がないのはいずれも壺　※ ←→ は接合関係を示す　13は、遺物の下部に土坑もしくはピットが存在する。[13]は下部にテラスが存在する。



第13図　小敷田遺跡（吉田1990より転載、左上は山川1996より転載）

出土遺構そのものが少なく確実ではない可能性もあるが、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれる場合と、周溝埋没開始後に入れられる場合、壺棺として使用される場合の３者があるのが分かる。

常代遺跡の土器の出土状況については、既に甲斐氏がまとめられている。（表４）この内第１期のものは周溝底面付近から出土するものが多い。SZ134C溝東端底面からは、壺が３個横倒しの状態で出土し、常代遺跡でこの時期の土器が周溝底面に置かれる(納められる)形で使われたことを示している。

小敷田遺跡では、１号周溝墓と11号周溝墓から多くの土器が出土している。各々の出土状況については既に『土器Ⅰ』で検討した。詳細はそちらに譲るが、１号周溝墓からは北東溝の溝中土坑、南東溝の溝中土坑から壺、甕が納められた状態で、南東溝の東立ち上がり部の底面からは壺が破砕した状態で２個体出土している。また、確実ではないが、方台部の流れ込み土中からも壺が出土している。11号周溝墓では、北東溝の周溝底から壺・甕が４個体並んだ状態で出土している。南東溝、北東溝の周溝底からも壺が、北西溝の南西端にある土坑からも高坏、異形土器が横転した状態で出土している。

このように、小敷田遺跡では、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれる（納める）場合と、周溝底で破砕される場合、方台部で使用されたものが流れ込む場合の３者があるのが分かる。

また、底部穿孔等の土器の変形行為については不明瞭な部分が多い。この時期、例えば小敷田遺跡１号周溝墓出土土器の中にも底部に小穴を穿孔したものがあるが、柿沼幹夫も指摘するように（柿沼1996）、集落出土土器にも同様の穿孔が見られ、この穿孔行為を後代に続く周溝墓出土土器に施されるものと、同等に扱うことはできないと考えられる。周溝墓における底部穿孔という土器に対する行為は、まだ見られないと考えて差し支えないと考えられる。

ここで第１期の様相についてまとめておきたい。周溝の平面形態はいずれも四隅切れだが、中里遺跡の周溝が比較的細く、直線的な溝状であるのに対して、常代遺跡と小敷田遺跡の周溝は長楕円形の土坑状である。群構成は、大小の規模のものが組み合わせで大きな群を形成している中里、常代遺跡の例に対して、小敷田遺跡は単発的、独立的な分布を示している。３遺跡とも遺物が出土する遺構としない遺構があり、一つのブロックの中で、規模の大小の組み合わせと合わせて遺物の多寡による組み合わせが認められる。また、常代・小敷田遺跡では、方形周溝墓と時期を同じくする土壙墓と考えられる土坑が多く検出されているが、中里遺跡では認められない。（註２）土器の扱われ方については、中里、常代、小敷田のいずれでも、周溝底面に置かれる場合があり、特に常代・小敷田両遺跡の出土状況は再葬墓の出土状況を髣髴とさせるものである。先の周溝の形態と合わせて、再葬墓を強く意識している感が強い。この他に、中里遺跡では、周溝埋没開始後に入れられる場合、壺棺として使用される場合、小敷田遺跡では、周溝底で破砕される場合、方台部で使用されたものが流れ込む場合があり、土器の使用方法が当初から複雑であることが分かる。

地理的な位置関係から言えば、中里→常代→小敷田の伝播の順番が考えられるが、上述の様相はこの墓制の受容が受容する側の主体的なものであることを窺わせ、単に地理的傾斜を考えるのみでは充分でない。特に常代、小敷田両遺跡の様相は、再葬墓と方形周溝墓の関東地方における

関係を示すものと考えられる。

常代、小敷田遺跡の再葬墓的な様相に関連して、小敷田遺跡の土器に見られる２次加熱について論じる中で私見を述べたことがある。(福田1995) この中で、春成秀爾氏の「関東地方在来の再葬墓が、西日本から伝来した方形墳丘墓の内部主体として採用され」たという小敷田遺跡の評価（春成1993pp.52下ℓ16～17）について触れ、「単純に引き継いだものではなく、周溝墓という墓制の中に取り込」んだと考えた。(福田1995ℓ13) 上述の３遺跡の様相はそのことをよく示している。方形周溝墓、再葬墓は決して排他的なものではなく、土器の扱い方に代表される再葬墓的な葬送儀礼の方法が取り込まれることにより、周溝の形態にも現れている関東地方独自の方形周溝墓が展開していくことになる。

(2) 第Ⅱ期の様相

Ⅰ期で点的な分布しか見られなかった周溝墓群は、Ⅱ期には栃木・茨城両県を除く関東地方全域に分布がみられるようになる。中でも、神奈川県の横浜市の鶴見川流域、千葉県の君津市、木更津市、袖ヶ浦市、富津市の小糸川流域、埼玉県熊谷市の熊谷扇状地に集中して分布することが知られている。また、東京都の武蔵野台地や埼玉県の大宮台地でも同時期の集落、周溝墓群が分布している。ここでは、その中でも資料的にまとまりのある、神奈川県横浜市歳勝土遺跡（小宮1975)、千葉県君津市常代遺跡、埼玉県熊谷市前中西遺跡（吉野2003)、東松山市代正寺遺跡（鈴木1991)、さいたま市明花向遺跡（飯持1984）を取り上げる。(第14～22図)

平面形　いずれも基本的には四隅切れの平面形である。ただし、いずれの遺跡でも少数ながら周溝のコーナーがある周溝墓が含まれている。周溝の平面形は全体的に幅が狭く、細長いものが多いが、常代遺跡、前中西遺跡のものには幅広のものが含まれ、第Ⅰ期からの継続性が感じられる。

群構成　歳勝土遺跡では、総数26基のうち23基がⅡ期の周溝墓である。大塚遺跡の墓域としてつとに有名なこの周溝墓群は列状の群構成を示し、一つのブロックの中に規模の大小がある。「コ」の字形の平面形のものは斜面部に地形に沿って並んでいる。

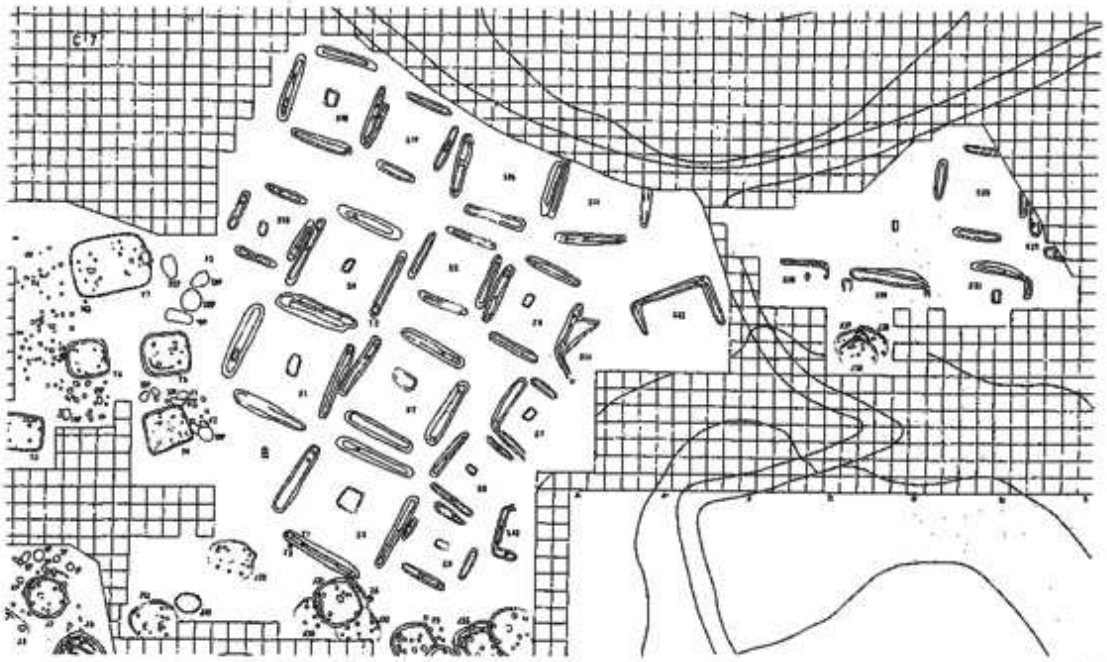
常代遺跡でⅡ期に該当するものは42基である。(甲斐1998) ブロックがまるごと移動しているような様相は見られず、第Ⅰ期に造営された周溝墓群を核にその周囲に隣接して拡大する。大小の組み合わせも継続し、造墓集団の継続性が窺える。

一方、前中西遺跡では、２～３基を１単位とした造営が行われている。群ごとに規模が異なるようだが、群の中ではほぼ同規模である。前述のように、Ⅰ期の小敷田遺跡とは時期的な間隙があるが、同様の群構成が意識されているものと考えられる。

代正寺遺跡でも、南側の一群は更に展開する可能性があるが、前中西遺跡同様に２～３基を単位とした小規模な群構成をとっていると考えられる。

明花向遺跡では、谷を挟んだ両側の舌状台地端A・B区から周溝墓が検出されている。A区に２基、B区に１基と散発的である。

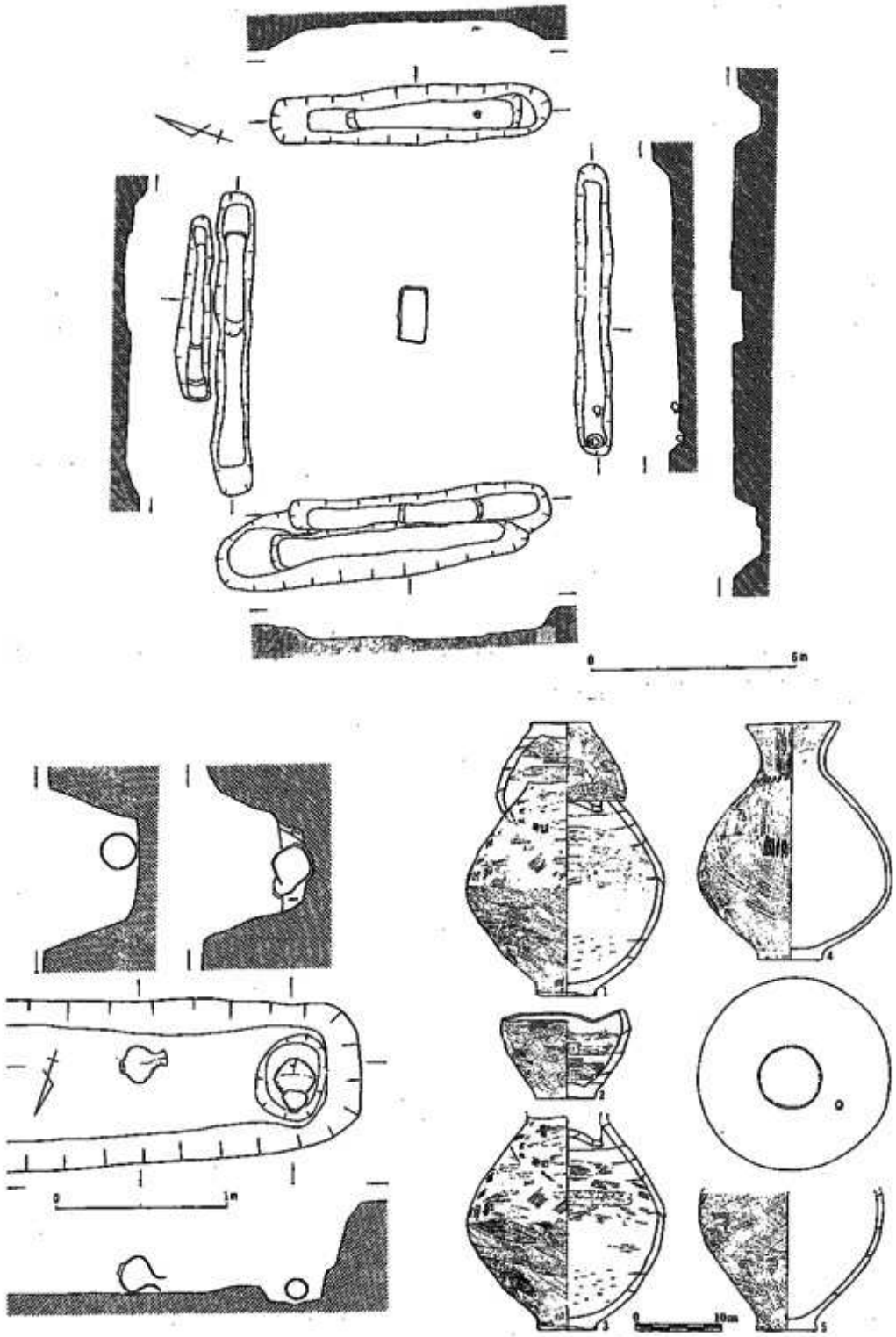
前中西、代正寺、明花向遺跡同様の群構成は、武蔵野台地北部の東京都北区赤羽台遺跡、大田区山王遺跡、港区伊皿子貝塚遺跡等でも見られる。それらも同様に群の中での規模の格差は認められない。



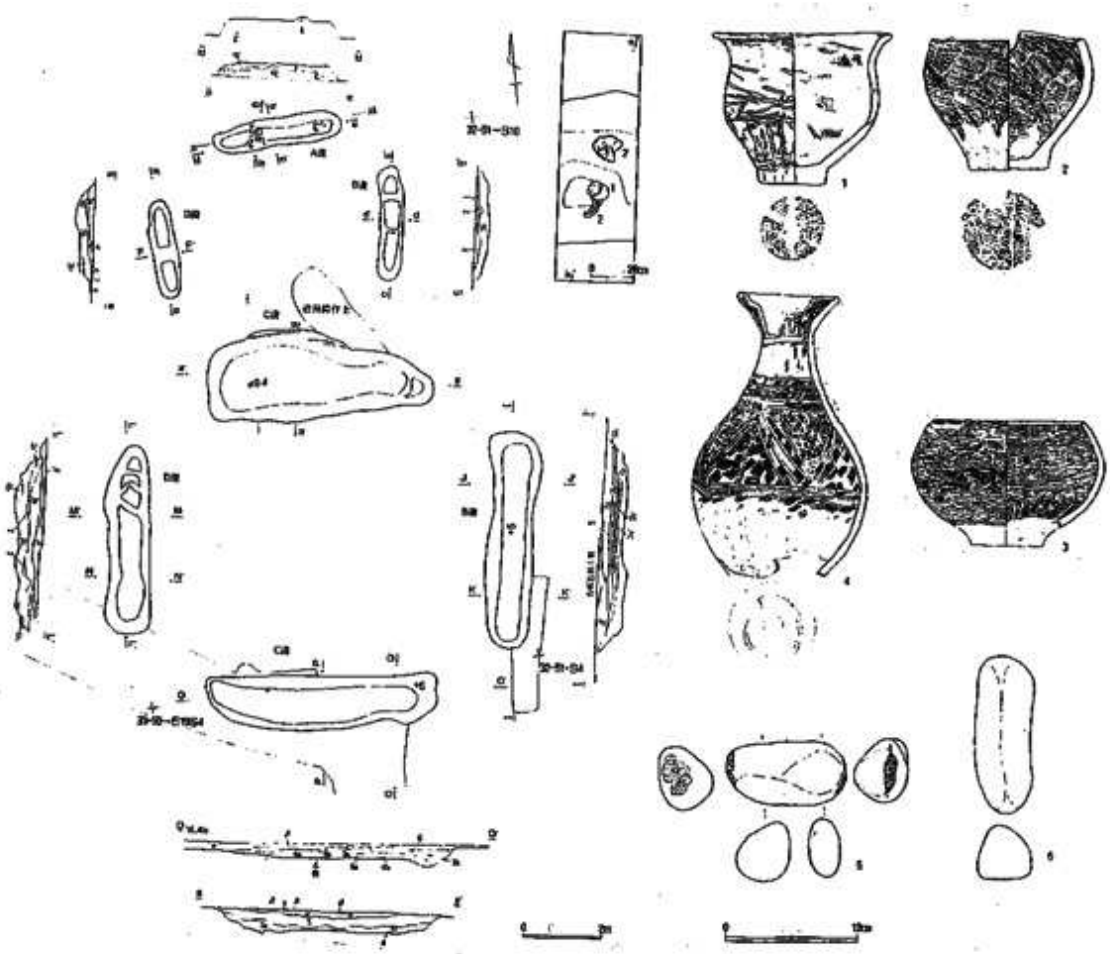
神奈川県歳勝土遺跡

番号	東溝	西溝	南溝	北溝	備　　考
S 1 号				壺 1	朝光寺原式（後期）
S 3 号	鉢 1	壺棺1		壺 1	宮ノ台式
S 4 号	壺 1		壺 1	壺棺1	〃
S 7 号				壺 1	朝光寺原式（後期）
S10号	甕1、壺1			甕 1	宮ノ台式
S11号		壺 2			〃
S13号				壺 2	〃
S14号		壺 1			〃
S15号				壺 1	〃
S16号			壺 1	鉢1、壺1	〃
S17号			壺 1	壺 3	〃
S22号				壺 1	〃
S26号			坏1、壺1		朝光寺原式（後期）

第14図　歳勝土遺跡全測図（小宮1975より転載）と出土土器一覧（茂木1996より転載）



第15図　歳勝土S4号周溝墓（小宮1975より改図・転載）



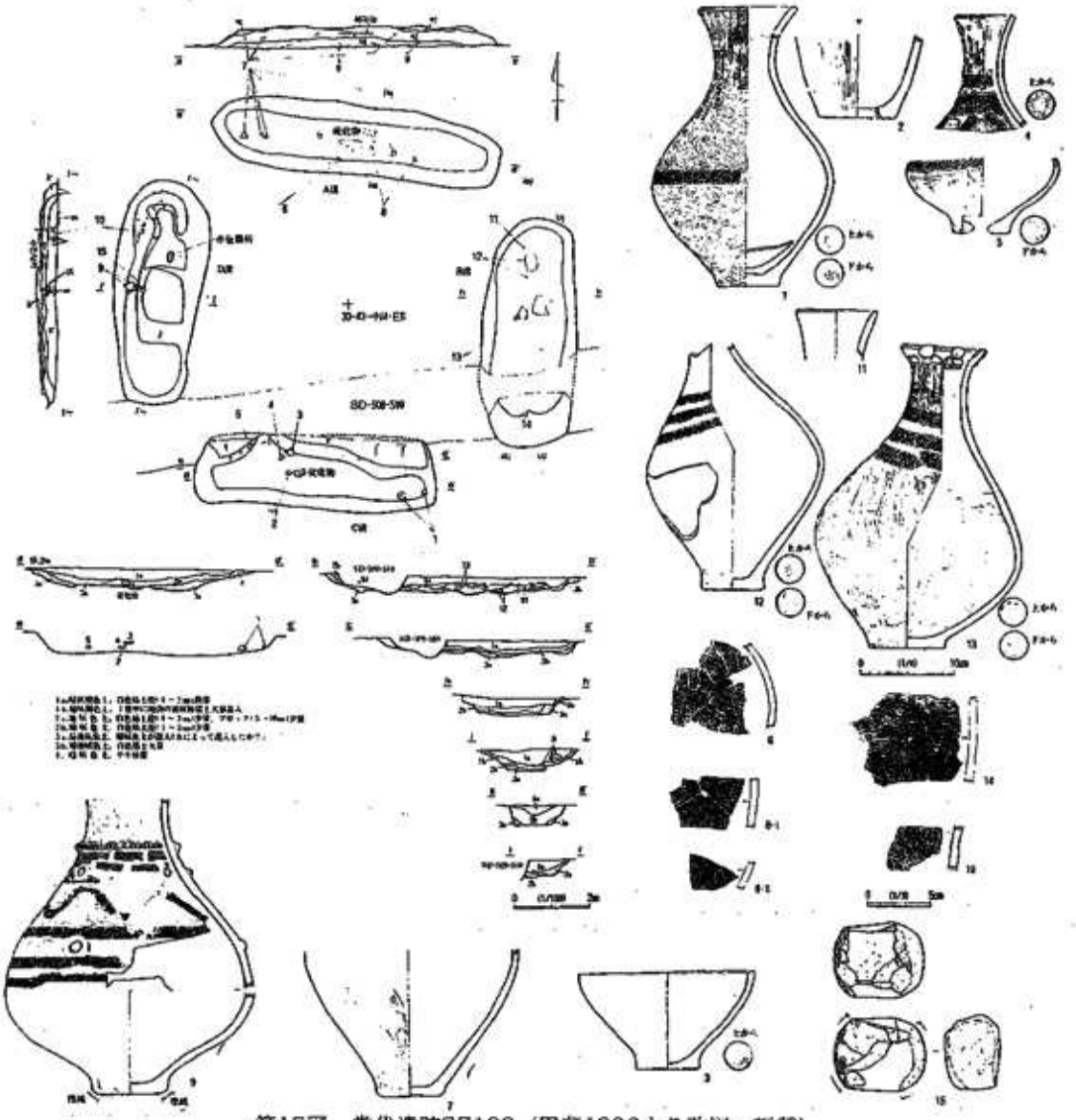
第16図　常代遺跡SZ1・2（甲斐1996より改図・転載）

以上のように、大小の規模のものを含み、まとまった群を構成する歳勝土・常代遺跡に対して、同規模の小さな群を構成する熊谷扇状地、高坂台地、大宮台地、武蔵野台地という対照的な様相が認められる。

土器の出土状況　歳勝土遺跡では９基で中心埋葬施設が確認されているが、副葬品、着装品的な遺物の出土はみられない。出土遺物の大部分は土器である。

歳勝土遺跡では、23基中10基で土器が出土している。図示したＳ４号周溝墓は、南溝の西端から壺棺と、底面に接して横倒しの状態で壺が出土している。このほかに底面から20cmほど浮いて壺が出土している。Ｓ３号周溝墓でも西溝の底に盛り土をして壺棺が埋設されている。このように歳勝土遺跡では、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれる（納められる）場合、埋没終了直前に置かれる場合、方台部方向に置かれたものが転落した場合という３者があるのが分かる。

常代遺跡の土器の出土状況については、前述のように甲斐氏がまとめられている。（表４）この内第Ⅱ期のものは、周溝底面付近から出土するものと上層から出土するという２通りの出土状況を示している。SZ1では１・２がＡ溝下層に入れられた状態で、３が上層から出土している。４はⅠ期のものだが、Ａ溝底で横倒しの状態で出土している。SZ138では、覆土上層から壺13

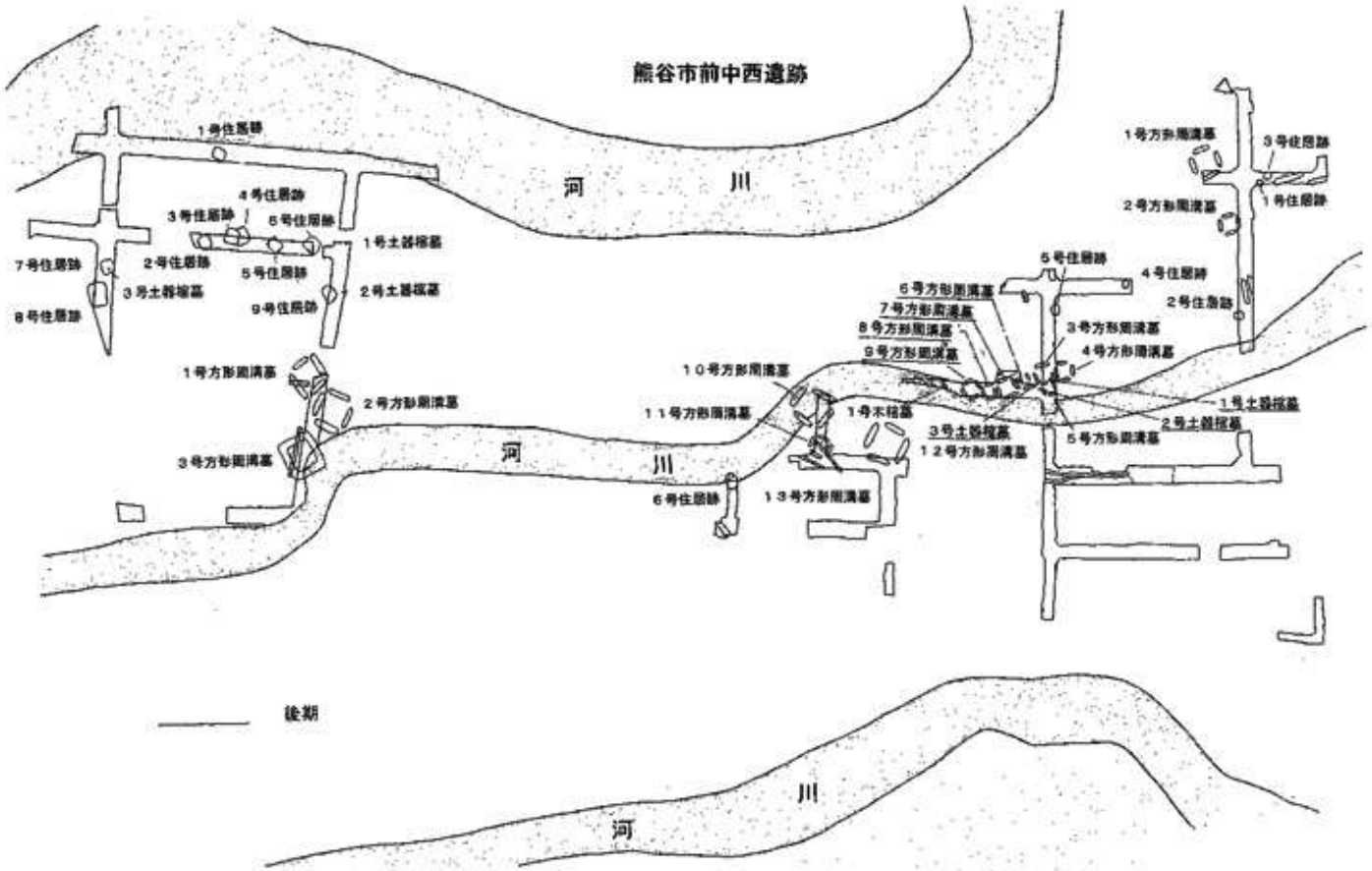


第17図　常代遺跡SZ138（甲斐1996より改図・転載）

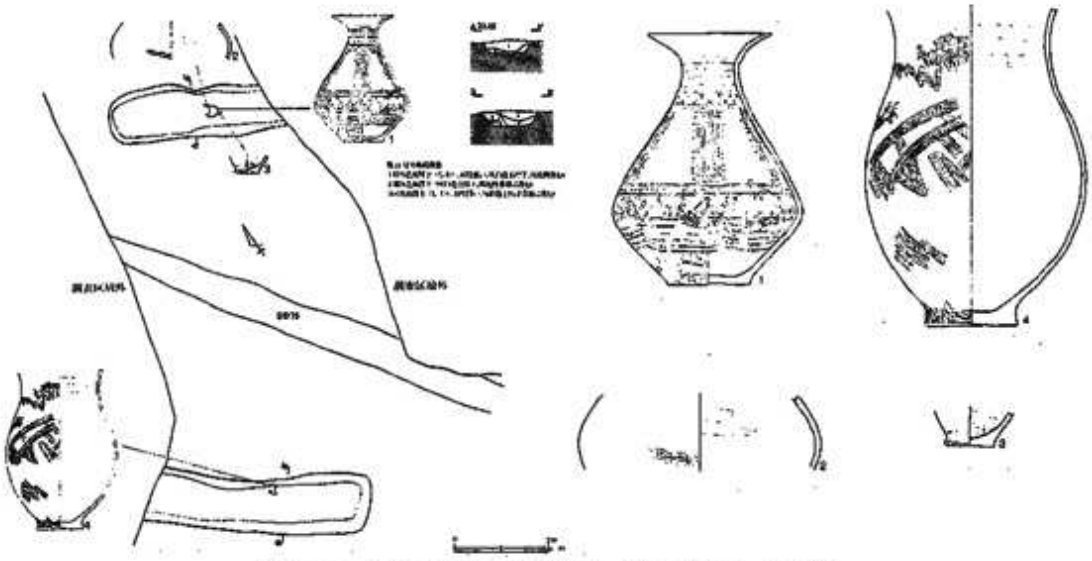
個、鉢１個、敲打具が出土している。常代遺跡でも土器の扱われ方に、周溝底面に置かれる（納められる）場合、埋没終了直前に置かれる場合、方台部方向に置かれたものが転落した場合という３者があるのが分かる。

前中西遺跡では、いずれの周溝墓からも破片ではあるが土器が出土している。図示した11号周溝墓では北溝周溝底から壺が、南溝周溝底から甕が出土し、完形のものが溝底に置かれる場合と、周溝墓周辺で行われた何らかの行為によりもたらされた破片が出土するという２通りの場合があることが分かる。

代正寺遺跡では、３～６号、９～11、13・15号周溝墓から多くの土器が出土している。この内Ⅱ期のものは３・５・９～11・13号である。（表５）各々の出土状況については既に『土器Ⅰ』で検討したことがあり、詳細はそちらを参照願いたい。３号周溝墓では壺４、甕１、高坏１が出



第18図　前中西遺跡全体図（松岡2004より転載）

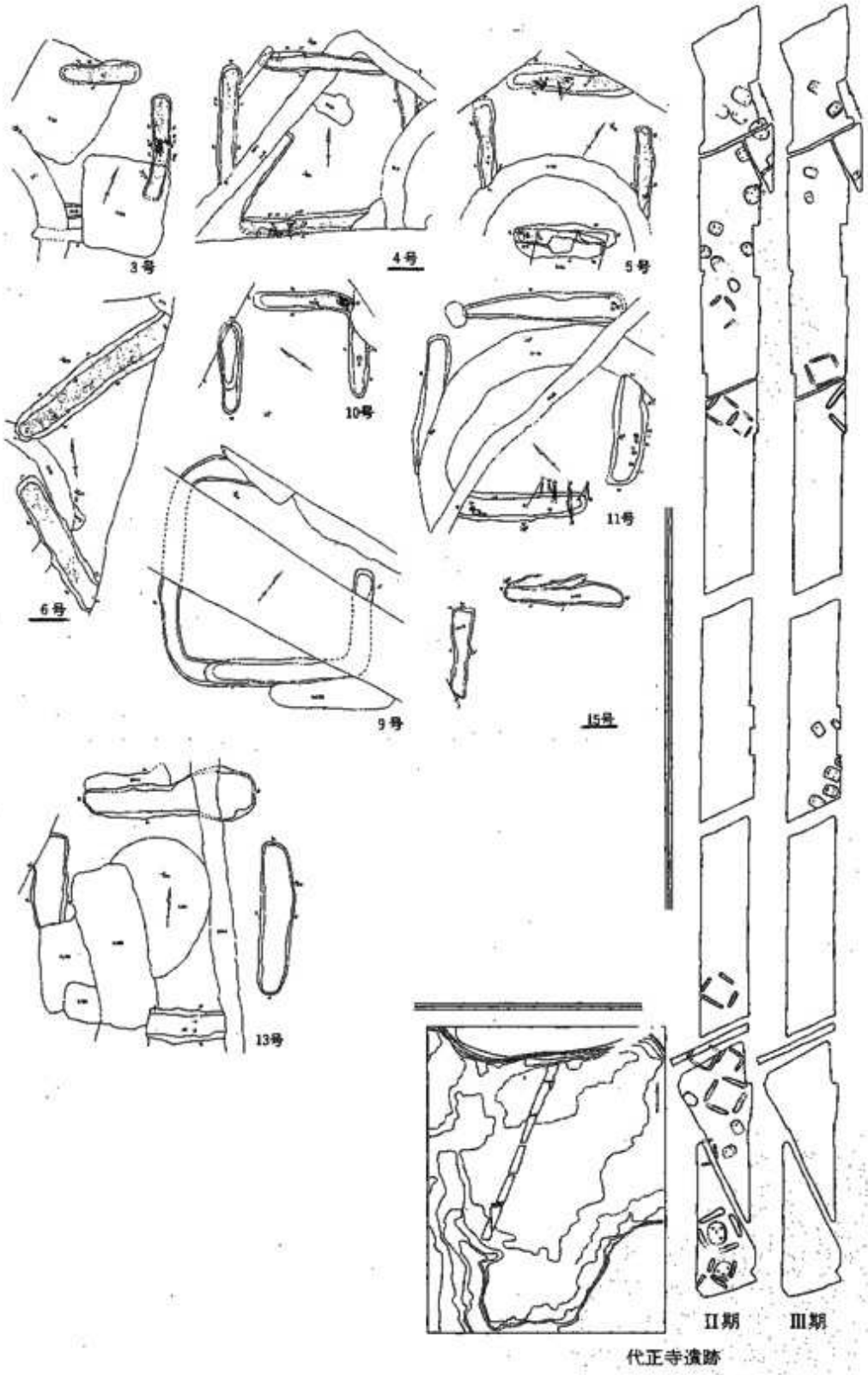


第19図　前中西遺跡11号周溝墓（吉野2003より転載）

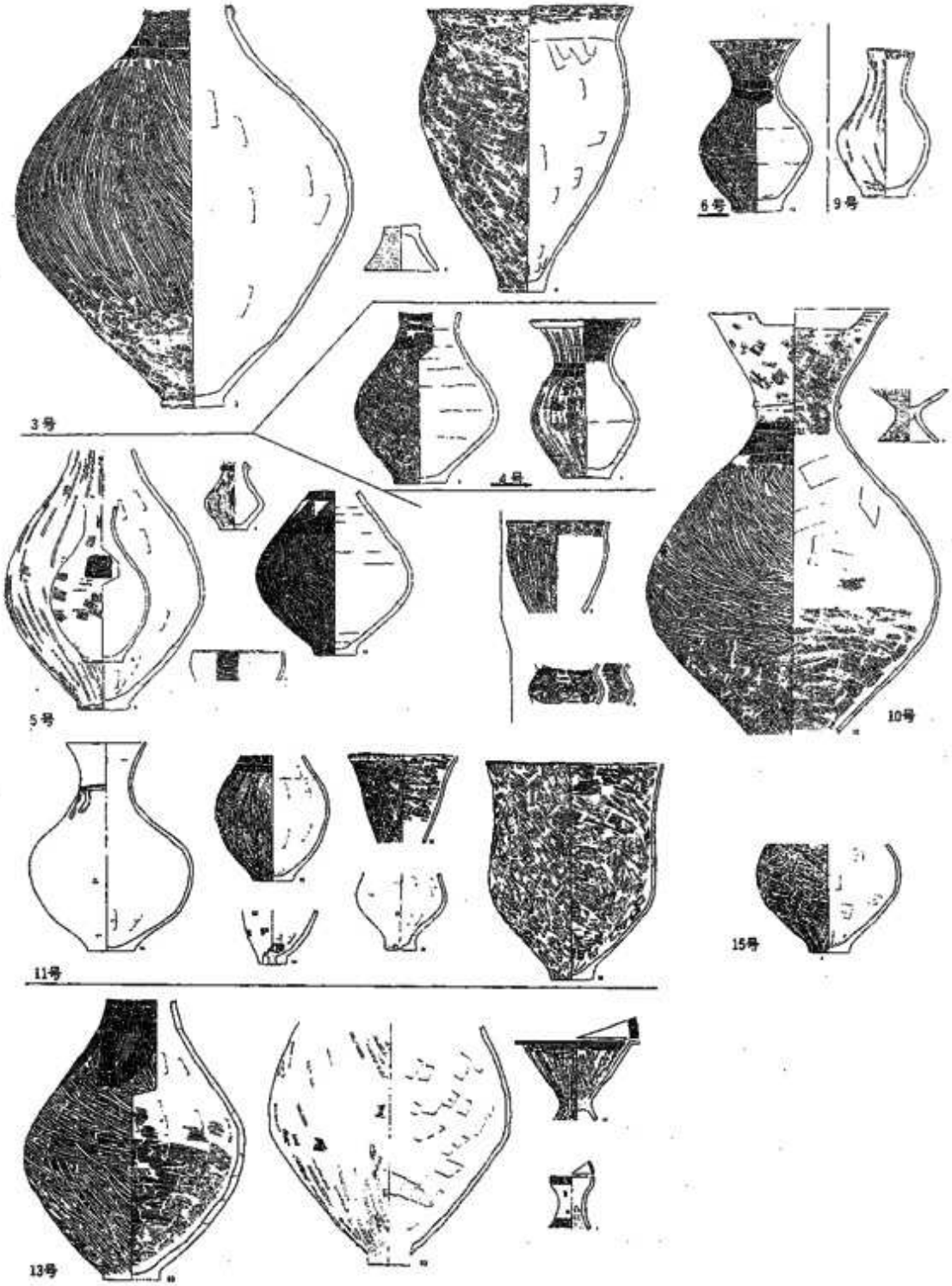
土し、東溝の方台部際の底面から若干浮いた状態で壺・甕・高坏が出土している。鈴木氏は土圧でつぶれたものとしており、周溝掘削後ほどなく周溝内に入れられた（納められた）ものと考えられる。５号周溝墓では壺10、高坏１が出土し、特に北西溝から壺５個体が集中して出土している。方台部からの転落と考えられるが、周溝埋没後に置かれた可能性もある。10号周溝墓では、壺６、甕３、高坏１が出土している。北東溝では壺２点が底面から、１点が周溝埋没途中に破砕されて出土している。前者は周溝掘削直後に入れられた（納められた）もの、後者は周溝墓築造後のある時点で行われた儀礼的行為の結果と考えられる。11号周溝墓では、壺25、甕６、台付甕１、高坏１、甑２が出土している。南西溝では壺１点が西コーナー近くの周溝底から出土している。これ以外は確認面近くから出土したものが多く、周溝埋没後に置かれた場合や周溝外から流れ込んだ可能性もある。代正寺遺跡では、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれる（納められる）場合、埋没終了直前に置かれる場合、周溝埋没途中に破砕される場合、周溝外から流れ込む場合、方台部方向に置かれたものが転落した場合という４者があるのが分かる。

明花向遺跡では、１号から壺４、甕３、鉢１が出土している。胴部全体の器形が窺える壺は、北溝東端の溝底から若干浮いて横転した状態で出土している。周溝掘削後ほどなく周溝内に入れられた（納められた）ものと考えられる。

ここで第Ⅱ期の様相についてまとめておきたい。周溝の平面形態は基本的に四隅切れだが、少数ながら周溝のコーナーのあるものが含まれている。周溝そのものは、概して細い溝状のものになるが、常代遺跡、前中西遺跡等のように幅広のⅠ期からの継続性を感じさせるものもある。群構成は、Ⅰ期から継続して大小の規模のものが組み合わせで大きな群を形成している常代遺跡の例、同様に列状の群構成を呈する蔵勝土遺跡の例に対して、前中西、代正寺、明花向、赤羽台遺跡といった熊谷扇状地から武蔵野台地北部の地域は、単発的、独立的な展開を見せ、群の中における大小の規模の格差は不明瞭である。各々の遺跡では、Ⅰ期同様に土器が出土する遺構としない遺構があり、一つのブロックの中で、規模の大小の組み合わせと合わせて遺物の多寡による組み合わせが認められる。



第20図　代正寺遺跡全体図と周溝墓（鈴木1991、山川1996より転載　下線後期）



第21図　代正寺遺跡出土土器（鈴木1991より転載）

表5　木曽免・代正寺遺跡出土土器一覧（柿沼1996より転載）

遺構名		壺	小型壺	無頸壺	甕	高杯	甑	小型台付甕	備　考
木曽免（1基）		1	2	1					無頸壺赤色塗彩
代正寺	2号			1					
	3号	2	1		1	1			小型壺赤色塗彩
	5号	9	1			1			壺2・小型壺・高杯赤色塗彩
	9号	2							
	10号	6			2	1		1	高杯赤色塗彩、小型台付甕は中部高地系
	11号	24			7	1	2		壺赤色塗彩2
	13号	9				1			壺1は中部高地系
計		53	4	2	10	5	2	1	77
		77%			14%	5%	3%	1%	

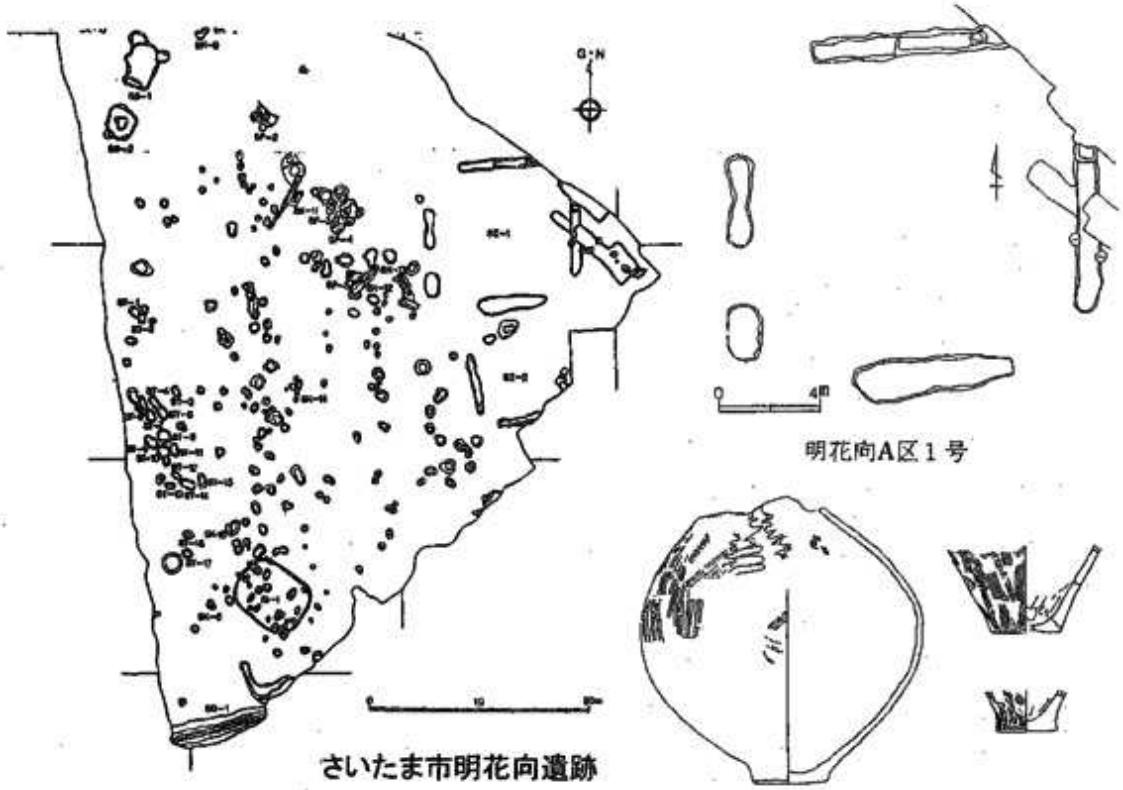
土器の扱われ方については、いずれの遺跡でも周溝底面に置かれる（納める）場合が認められ、基本的な方法であったことが分かる。また、破砕される場合や、方台部から流れ込む場合があり、基本的に1期の方法を踏襲しているようである。歳勝土、常代、代正寺の3遺跡では、周溝埋没終了直前（上層）に置かれる方法がとられている。この方法はこの段階から始まる可能性がある。

一方、器種構成では、壺が卓越している歳勝土、常代遺跡に対して、それ以外の遺跡では甕も多く出土し、儀礼執行時における道具立てが若干異なる可能性がある。

このように平面形態では、1期同様に常代、前中西の幅広のものとそれ以外、群構成においては歳勝土、常代とそれ以外という対照的な様相が認められた。土器の取り扱いについては、周溝底に土器を納める方法が一般的なものと認められ、これに歳勝土、常代、代正寺の3遺跡では、周溝埋没終了直前（上層）に置かれる方法が加わる。1期の使用方法を踏襲する部分と新たな方法が導入された部分があることになる。

上述の様相は、先に示した石川氏の土器分布圏と合致する部分もあれば、そうでない部分もある。

それは、こういった通常の群構成とは別に、関東各地で特徴的な造営の様相が見られる例からも窺える（第23図）。石川日出志氏が指摘するように（石川2002）、宮ノ台式土器分布圏で特徴的な「環濠集落内大形方形周溝墓」は、図に示した千葉県佐倉市大崎台遺跡（柿沼ほか1987）、神奈川県横浜市折本西原遺跡（石井1980）といった宮ノ台式の分布圏とは別に、埼玉県吉見町



第22図　明花向遺跡全体図、A区１号周溝墓（鈴持1984、柿沼1986より転載）

大行山遺跡、群馬県高崎市高崎城三の丸遺跡（中村1994）でも認められ、第Ⅱ期の段階で関東地方全域にこの群構成の方法が拡散し、受容されていたことが知られている。

ここで各要素を並べて、地域性について論じることもできるとも思えるが、この状況はどうやらⅢ期の前半まで継続するものと思われ、Ⅰ～Ⅱ期、Ⅲ期双方の様相を整理した時点で述べるのが適切と考えられるため、別に述べることにしたい。

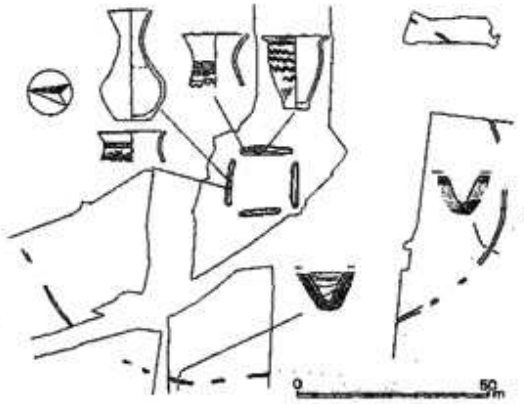
4、小結

以上のように、関東地方の方形周溝墓では導入当初から、周溝底に置かれる（納められる）、埋没が進行後に置かれる、破砕される、方台部から流れ込むといった土器の出土状況が認められた。特に第Ⅰ期においては、これまで言われてきたように縄文時代以来、あるいは再葬墓からの伝統を、周溝の形態、土器の周溝底への入れ方から色濃く感じられた。ただし、それは常代遺跡、小敷田遺跡でのことで、中里遺跡では見られない。また、群構成のありようでは、中里、常代で共通し、小敷田遺跡では異なる。周溝墓＋土壙墓といった組み合わせも同様であり、この各要素の対照的な様相は、その関係の把握が一筋縄ではいかないことを予想させる。

それは第Ⅱ期でも同様であり、平面形態ではⅠ期同様に常代、前中西遺跡の幅広のものとそれ以外、群構成においては歳勝土、常代遺跡とそれ以外という対照的な様相が認められた。土器の取り扱いについては、周溝底に土器を納める方法が一般的なものと認められ、これに周溝埋没終了直前（上層）に置かれる方法が加わる。Ⅰ期の使用方法を踏襲する部分と新たな方法が導入された部分がある。

千葉県大崎台遺跡

神奈川県折本西原遺跡



群馬県高崎城三の丸遺跡

第23図　環濠内大形周溝墓（安藤1991、石川2002、山岸1996より転載）

こうした様相は、土器の分布圏と共通する部分もあるが、異なる部分もあり、当時の地域性が単に一つの文化要素で語り得るほど単純でないことを示している。この地域性の問題については次稿で取り扱いたい。

今回は弥生時代中期の様相を俯瞰するにとどめた。第Ⅲ期、一部第Ⅳ・Ⅴ期までの作業を終えているが、資料に過不足を感じ、あえて掲載しなかった。その中では、周溝底に土器を入れる（納める）、埋没進行後に土器を入れる（立てる）、方台部からの流れ込み、破砕といった各状況が継続して認められた。また、第Ⅲ期の前半までは基本的に第Ⅱ期と同様の遺跡立地、群構成、土器の取り扱いが継続するようである。第Ⅲ期後半になると埋没進行後に土器を入れる（立てる）部分が、打欠土器から焼成後底部穿孔土器に、第Ⅳ・Ⅴ期には焼成前底部穿孔土器に入れ替わる。どうやらその有無が階層性に対応しているようである。こういった基本的な出土状況の継続と新出要素の受容という様相は、どこかしら当該期の土器のパーツの入れ替えの状況（福田2000）に似ており、こうしたあり方が古墳時代への移行の実態と考えられる。二重口縁壺を中心とした焼成前穿孔土器の儀礼については、囲繞祭祀として最近古屋紀之氏（古屋1998ほか）が積極的な分析を行っているものの、こういった各地域の方形周溝墓出土土器をもとにした儀礼行為の文脈の中での位置づけが欠けているように思え、片手落ちの感があるがいかがであろうか。

次稿ではこういった問題を含めて第Ⅲ期以降の状況をみていくことにしたい。

（2004年6月20日記）

謝辞

本稿を草するに当たり、栗岡潤、的野善行の両氏には多大なご教示とご協力をいただいた。また、甲斐幸弘、吉田稔、松岡有希子の各氏には、常代、小敷田、中里の各遺跡の様相についてご教示いただいた。中山浩彦、宅間清公の両氏にも弥生時代全般についてご教示いただいている。また本稿は方形周溝墓研究会における諸氏の発表に多大な恩恵を受けている。諸般の事情で参加できない筆者のことをいつも気にかけていただいている。図版の作成に当たっては福田恵子の協力があった。以上の方々に末筆ではあるが感謝申し上げたい。

なお、本稿の内容は金井塚良一先生のご紹介でお話させていただいた大東文化大学オープンカレッジ春季講座「地中からのメッセージ」の内容の一部である。当日筆者の分りづらい話を辛抱強く聞いていただいた受講生の皆様と、金井塚先生に最後に感謝申し上げる次第である。

註

1、常代、小敷田遺跡の焼土や炭化物を含む土坑については、2つの大きな考え方がある。一つは甲斐氏がここで示した墓に関連する施設とするものである。甲斐氏は、君津郡市内の同時期の再葬墓、例えば向神納里遺跡で検出された同種の土壙との比較から、この可能性を指摘する。もう一つは、集落に関連する施設とする考え方である。及川良彦氏は、先行する集落に伴う廃棄土坑と考える。（及川2003）及川氏の見解は低地集落の再評価という点から示唆に富み、傾聴に値するが、一方でこれまで再葬墓の関連施設とされる土壙との比較、検討は尽くされたの

かという疑問が残る。筆者は、両遺跡の土坑を再葬墓関連施設と考えているが、同様に検討を尽くしたわけではない。今後の課題である。なお、この点に関連して、常代遺跡については甲斐博幸、小敷田遺跡については吉田稔の両氏からご教示いただいた。

2、中里遺跡ではこういった土坑と方形周溝墓は、分布を異にする。集落→墓域という変遷は考え難いということである。松岡有希子氏にご教示いただいた。

参考・引用文献

相京建史　1986「群馬県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』pp.153～164　同成社

安藤広道　1991「弥生時代集落群の動態」『調査研究集録第８冊』pp.133～164　横浜市埋蔵文化財センター

石井　寛ほか　1980　「折本西原遺跡」横浜市埋蔵文化財調査会

石川日出志 1998「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学第102号』pp.83～109　駿台史学会

伊丹　徹　1986「神奈川県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』pp.97～120　同成社

伊藤敏行　1986「東京湾西岸流域における方形周溝墓の基礎的研究」「研究論集Ⅳ」pp.43～89 東京都埋蔵文化財センター

伊藤敏行　1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の基礎的研究」『研究論集Ⅵ』pp.1～69　東京都埋蔵文化財センター

伊藤敏行　1996「群構成論」『関東の方形周溝墓』pp.331～347　同成社

伊藤敏行　1996「個別形態論」「関東の方形周溝墓」pp.365～375　同成社

伊藤敏行・及川良彦　1996「東京都の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』pp.57～74　同成社

及川良彦　1996「「方形周溝墓」出土の土器　南関東②東京都」「関東の方形周溝墓」pp.209～228　同成社

及川良彦　2003「関東地方の低地遺跡の再評価(4)－常代遺跡群の評価を巡って－」「西相模考古第12号」pp.72～102　西相模考古学研究会

甲斐博幸　1996「常代遺跡群」君津郡市文化財センター発掘調査報告書第112集　(財)君津郡市文化財センター

甲斐博幸　1998「常代遺跡群の造墓過程」「研究紀要Ⅷ」pp.41～58　(財)君津郡市文化財センター

柿沼修平　1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会

柿沼幹夫　1996「「方形周溝墓」出土の土器　北関東①埼玉県」「関東の方形周溝墓」pp.247～318　同成社

河合英夫・呉知英夫　1997「中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書」小田原市文化財調査報告書第61集　小田原市教育委員会

君津郡市文化財センター　1996『研究紀要Ⅵ』　(財) 君津郡市文化財センター

鈴持和夫　1984「明花向・明花上ノ台・井沼方馬場・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小宮恒夫　1975「歳勝土遺跡」横浜市埋蔵文化財調査委員会

黒澤　浩　1986「弥生墓制の中における「方形周溝墓」」「関東の方形周溝墓」pp.9～20　同成社

群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会　1988「東日本の弥生墓制」北武蔵古代文化研究会

合田芳正　1995「「対」の土器」「海老名本郷Ｘ－Ⅳ」pp.1027～1032　富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調

査団
設楽博己　1991「関東地方の弥生土器」『邪馬台国時代の東日本』pp.72～80　国立歴史民俗博物館
杉崎茂樹　1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之　1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
立花　実　1996「『方形周溝墓』出土の土器　南関東①神奈川県」『関東の方形周溝墓』pp.179～208　同成社
立花実・秋田かな子　2000「方形周溝墓の分析」『王子ノ台遺跡　弥生・古墳時代編』pp.628～653　東海大学
中村　茂　1990『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』高崎市文化財調査報告書第107集　高崎市教育委員会
中村倉司・宮瀧交二　1994『検証　関東の弥生文化』埼玉県立博物館
比田井克仁 2003「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観　土器Ⅱ』pp.357～368　小学館
春成秀爾　1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』pp.47～91　国立歴史民俗博物館
福田　聖　1995「方形周溝墓と土器Ⅰ」『研究紀要第11号』pp.1～54　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
1996「方形周溝墓の死者儀礼」『関東の方形周溝墓』pp.395～412　同成社
2000『方形周溝墓の再発見』同成社
2001「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(5)」『埼玉考古第36号』pp.37～66　埼玉考古学会
古屋紀之　1998「墳墓における土器配置の系譜と意義」『駿台史学第104号』pp.31～82　駿台史学会
2002「古墳出現前後の葬送祭祀－土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理『日本考古学第14号』pp.1～20　日本考古学協会
松岡有希子 2004「北島式と集落」『北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』pp.47～68　埼玉考古学会
茂木雅博　1996「関東の「方形周溝墓」の特徴」『関東の方形周溝墓』pp.21～29　同成社
山川守男・坂本和俊・福田　聖　1986「埼玉県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』pp.97～120　同成社
山岸良二・甲斐博幸・諸橋知義　1986「千葉県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』pp.75～96　同成社
山岸良二（編）　1996『関東の方形周溝墓』　同成社
吉田　稔　1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉野　健　2003『前中西遺跡Ⅲ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会

研究紀要　第19号
2004
平成16年7月26日　印　刷
平成16年7月30日　発　行
発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里町船木台4－4－1
電話　0493－39－3955
印　刷　朝日印刷工業株式会社